

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

石巻

豊橋校区史

1

Ishimaki







豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ 石巻



昭和20年代 一本松より石巻山を望む

石巻の自然



ジロボウエンゴサク

イワシモツケ



オドリコソウ



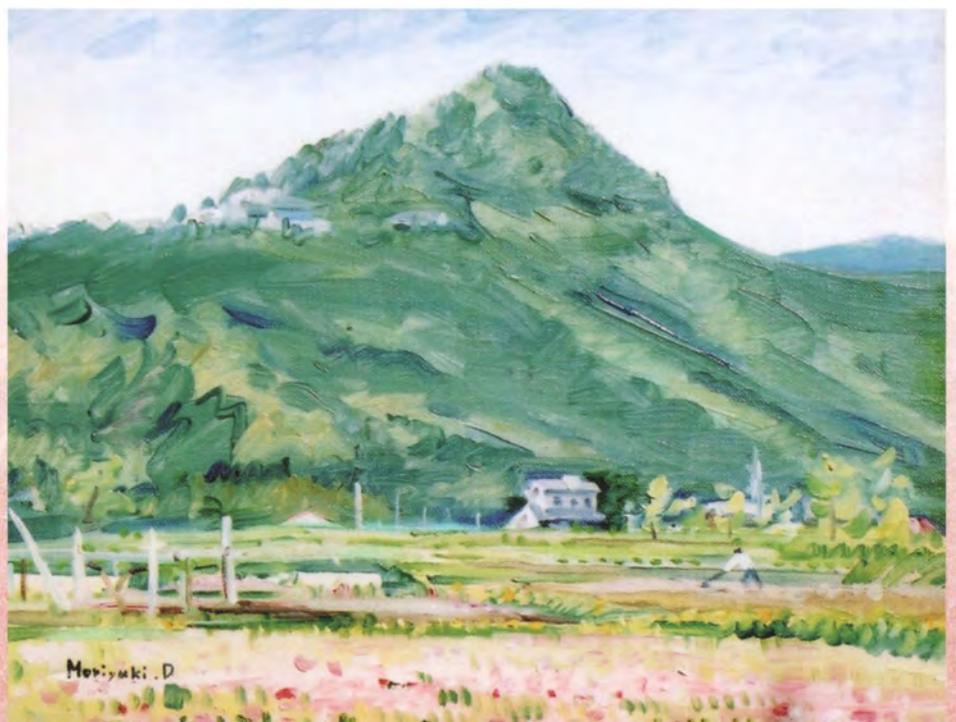
イシマキシロマイマイ



ミカワマイマイ



クモノスシダ



石巻の名所



なぎの木



ヌレボトケ

石巻神社



蛇穴



玉泉寺



東光寺



吉田宿 本陣の門



東頭稲荷神社



このしろ池



石巻の祭り



管粥神事



歌舞伎



金田の祭り



鬼祭り



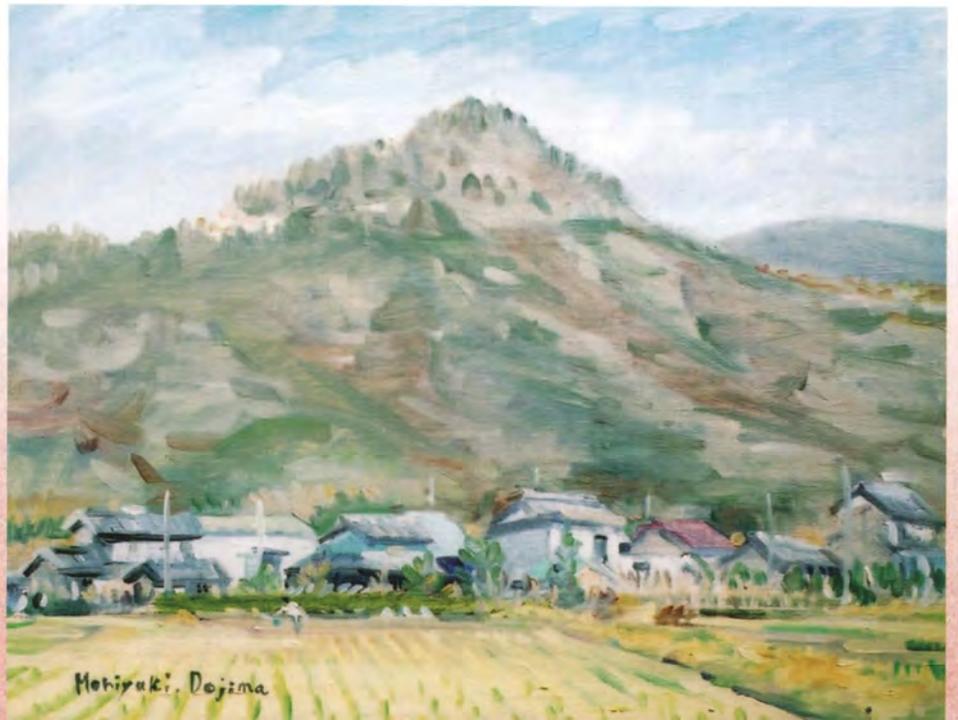
盆踊り



手筒花火



村芝居



発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業にすばらしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度
石巻校区総代会長

竹 下 勝 治

豊橋市制 100周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

石巻校区は緑豊かな自然の中にあります。石巻山を背にして東西に広がる平野が、私たちの校区です。田や畑に囲まれた農村です。秋には米や果実が豊かに実ります。巨峰ぶどうや梨、石巻特産の次郎柿は有名です。

また、昔から言い伝えられている伝説がいくつもあります。石巻小学校の野外劇にも取り上げられて、毎年上演されています。

今日の石巻のくらしはどのような歴史の上に営まれているのでしょうか。この度、校区の歩みを編集することになりました。知っているようでもよく分からないことが多いと思います。石巻の自然や人々のくらしの変遷などをできるだけ分かりやすく読み物にまとめていただきました。

校区の自然や歩みを知っていただくとともに、地域に愛着をもってさらに発展させるために役立てていただけたら幸せです。

編集にあたられました方には、大変なご苦勞をおかけしました。本当にありがとうございました。

校区の皆様には、これからも石巻校区の発展のために、いっそうのご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。発刊のごあいさつといたします。

目次

CONTENTS

第1章 自然と環境

- 1 位置と地形 7
 - (1) 位置 7
 - (2) 地形と地質 7
 - (3) 自然の宝庫「石巻山」 7
- 2 豊かな湧水系 10
 - (1) 新池と矢田川 10
 - (2) 三口池と三輪川 10
- 3 自然保護と活用 11
 - (1) 石巻山多米県立自然公園 11
 - (2) 石巻山風致地区 11

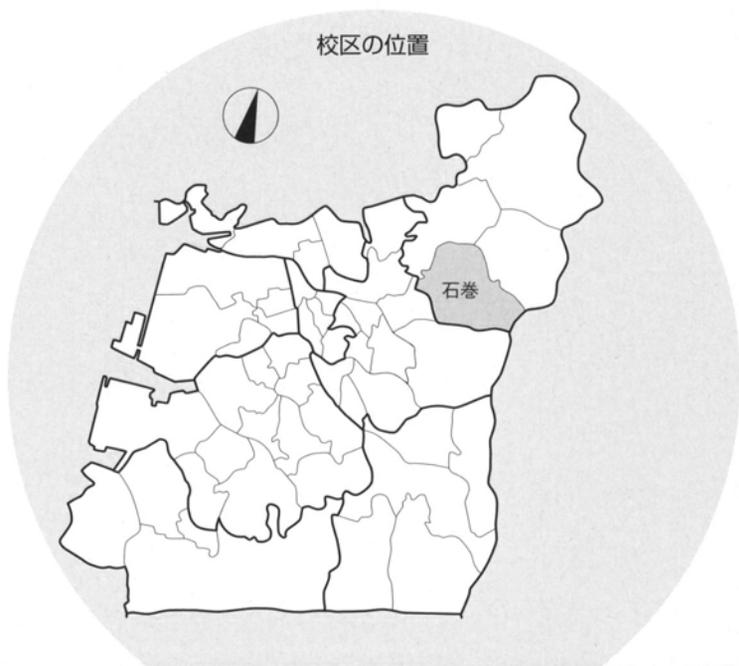
第2章 歴史と生活

- 1 古代の石巻校区 12
 - (1) 縄文時代 12
 - (2) 弥生時代 12
 - (3) 古墳時代 12
 - (4) 鎌倉時代以降 13
 - (5) 南北朝時代 13
 - (6) 八名郡の古城 14
 - (7) 戦国時代以降 14
 - (8) 明治時代以降 15
- 2 産業の移り変わり 18
 - (1) 農業 18
 - (2) 果樹栽培 21
 - (3) 畜産 22
 - (4) 農地改革 22
 - (5) 土地改良 23
 - (6) 米の減反政策 27
 - (7) 商工業と観光 28

第3章 教育と文化

- 1 石巻保育園のあゆみ 29
 - (1) 三輪保育所の開設 29
 - (2) 石巻保育園と改称 29
 - (3) 石巻保育園移転 30

- (4) 遊戯室増改築 30
- 2 石巻小学校のあゆみ 31
 - (1) 八名郡第9中学区40番小学神ヶ谷学校 31
 - (2) 八名郡第34番小学三輪学校 31
 - (3) 八名郡三輪村立尋常小学校 31
 - (4) 八名郡村立三輪尋常小学校 32
 - (5) 八名郡石巻村立三輪尋常高等小学校 32
 - (6) 八名郡石巻村立三輪国民学校 33
 - (7) 八名郡石巻村立三輪小学校 33
 - (8) 豊橋市立石巻小学校 33
 - (9) 石巻小学校移転 35
 - (10) 石巻小学校の特色ある取組 37
- 3 社会教育 39
 - (1) 青少年教育 39
 - (2) PTA活動 40
 - (3) 校区社会教育委員会 41
 - (4) 青少年健全育成会 41
 - (5) その他の活動 41
- 4 社寺と伝説 42
 - (1) 神社 42
 - (2) 寺 44
 - (3) 伝説 45
 - (4) 人物 49
- 参考文献 51
- 編集後記 52



第1章 自然と環境

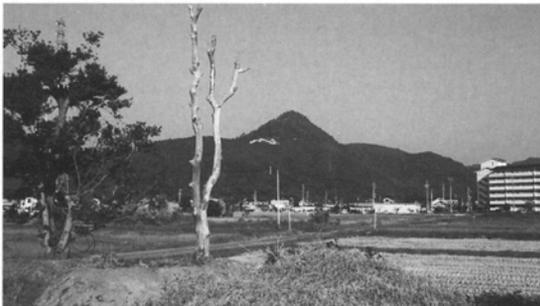
1 位置と地形

(1) 位置

三河に奇山なし、ただひとつ霊峰石巻山あるのみ、と語り継がれてきた「石巻山（海拔358m）」は、ふるさとのシンボルである。

この麓に広がる石巻校区は、豊橋市の東部丘陵地区にあり、静岡県との県境を南北に連なる八名弓張山地の西部に位置しており、校区の面積は890ha余である。

石巻山を中心とした山地は、「石巻山・多米県立自然公園」として、また、この周辺は「石巻山風致地区」として愛知県風致条例により、自然景観の保全が進められている。



霊峰石巻山

(2) 地形と地質

豊橋市の山と聞けば、まず石巻山という答が返ってくる。市街地の東部に連なるなだらかなラインの山並みの中で、天を突き刺すように聳え立つ三角錐の石巻山は、際立って目を引く山である。

石巻山は、豊橋市の東部丘陵地を占める八名弓張山地から、西に延びる支陵の主峰である。

この支陵の山麓の北側に「神郷」南側に「金田」の住宅地、農耕地が拓けている。

石巻山の山頂部は石灰岩という岩石でできている。石灰岩は、太古に生きていた珊瑚などの生物や海中の石灰分がもとになってできた岩石である。また、山腹には海底火山の噴出物により形成された緑色岩や、チャートと呼ばれる、小さな化石を含んだ岩石が見られる。これらの岩石は、2億数千万年もの昔から1億数千万年の間に、長い時間をかけて珊瑚礁などが発達した火山島や海底の堆積物などが、海洋のプレートの移動に伴って陸側に付加し、長い時間と大きな力や熱を受け変化し現在の弓張山地が形成されたと考えられている。

石巻山の中腹にある「このしろ池」周辺では、海底火山の噴出物からなる緑色岩の上に石灰岩が接しているところが観察できる。この石灰岩からは化石類は見つかっていないので確かな証拠はないが、かつての珊瑚礁が変化してできたものかもしれないと想像してみるのも、また、楽しいことである。

この山地から山麓の丘陵地には、林地土壌として褐色森林土が分布している。そして、三輪川、矢田川沿いに広がる農地は、黒ボク土や灰色低地土が多く分布し、校区の稲作、果樹園芸など、農業を支えるものとなっている。

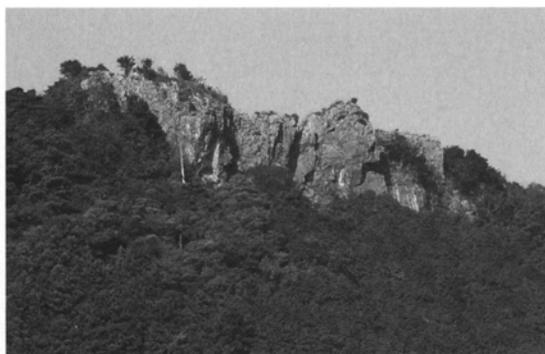
(3) 自然の宝庫「石巻山」

標高358mの石巻山は、まわりの山々より特別高いわけではないが、その目立つ形によ

り昔から神のよりどころとされてきた。

山上には、千年以上の歴史をもつ石巻神社が祀られている。また、北側山麓の神郷には里宮（下社）も鎮座している。

石巻山の山頂は巨大な岩が並んでおり、点ではなく東西に長い壁のような石灰岩でできている。また、この一帯は石灰岩地帯に特有の植物相、生物相が認められる。このため昭和27年（1952）には、国の天然記念物（石灰岩地植物群落）として指定され保護されている。



三ツ口池から眺める石巻山頂

緑色岩と石灰岩地 石巻山をつくる岩のほとんどは緑色岩（輝緑凝灰岩）などの比較的風化しやすくもろい岩などであるが、石灰岩が帽子のようにかぶさり、それに守られる形で崩れずに残っていると考えられる。

県道石巻山線のあちらこちらの切り通しには、板かブロックを重ねたような岩が現れている。また、中腹の旅館街の坂道でも、緑がかかった色をした縞々でブロック様の岩が見られる。この岩は輝緑凝灰岩（現在では緑色岩といわれている）といわれ、2億年ほど前、海底火山の活動で噴き上げられた火山灰が水底に積もってできた堆積岩で、神社の周辺には参拝者による祈願をこめたこれらの岩のかけらが積み上げられている。

さて、石巻神社の石段の途中から山頂への道が右に分かれている。このあたりから白っぽい石が顔を出しはじめる。石巻山の奥の院

といわれる不動堂（火災で焼失）の跡地に立って見上げると、石灰岩の大岩壁が迫ってくる。中腹までの緑色岩は、このあたりではっきりと石灰岩に変わっていることがわかる。この大岩の根元には、岩の間から水が沁み出して、小さな池をつくっている。「このしろ池」と命名され、神の岩から湧き出た泉として昔から大切にされてきた。石灰分を多量に含み、塩分も多く、硫黄の痕跡を含有し、さらに硫酸、亜硝酸の痕跡がある。



このしろ池

ここからは、頂上までの山登りコースとなっている。

石灰岩のかけらがいたるところにあり、これを踏みながら歩く道の途中には地中に空洞でもあるのか、足音が響くといわれる「ドンドン岩」、身体を細くしてどうやら通り抜けられる「石巻山の蛇穴」、伝説により巨人の足跡といわれる「ダイダラボチの足跡」という岩の窪みなどが現れてくる。



石巻山蛇穴

これらはいずれも長い年月をかけて雨水に溶かされてできた石灰岩の不思議な自然の造形である。

石巻山頂・カルスト地形 「大天狗・小天狗」という標識板のある大岩を目に進むと、やがて山頂への登り口である。切り立った岩の間を鉄梯子を頼り登り切ると、いよいよ山頂にたどり着く。

山頂は低い草木がまばらに生え、広場のほとんどない岩場だが、見渡すと360度の大展望が開けている。西を見ると豊橋市街地、三河湾、東には弓張山地の山々、空気の澄んだ日には、遠く富士山や南アルプスの山々を望むことができる。

足元は石灰岩の巨大な岩塊が、西から東へ岩肌を見せて並んでいる。そして、南面北面は、目の眩むような直立した岩壁となって森の中に切り込んでいる。ここは、まさに自然の恵みによる素晴らしい山地であり、ふるさと石巻の宝でもある。

石灰岩地植物群落 石巻山地と弓張山地周辺の地域では、1,000種を超える植物の生育が見られる。そして石巻山頂付近の石灰岩地には、植生分布の限られた貴重な植物が生育している。

このことから「石巻山石灰岩地植物群落」として、昭和27年（1952）に国の天然記念物に指定された。

この石灰岩地植生が見られるのは愛知県内ではこの地域だけであり、貴重な自然遺産といえる。

さて、山頂の岩塊一帯には石灰岩地植生を示す代表的な以下の植物が生育している。

・低木類として

ステゴビル、マルバイワシモツケ
イワツクバネウツギ、ヤブサンザシ
ビワ、カヤ、イボタノキ、エノキ、
バイカウツギ、ネムノキ、など

・つる性植物として

ツルマサキ、ホウライカズラ、
イタビカズラ、テイカカズラ、など

・草本類として

シギンカラマツ、イブキボウフウ、
クサボタン、ミツバベンケイソウ、
カワミドリ、キリンソウ、など

・シダ類として

キハダ、ヤナギイチゴ、オニヤブソテツ、
コバノヒノキシダ、アオガネシダ、
ウラボシノコギリシダ、カタバミ、など
が着生している。

このうち、クモノスシダが最近見られなくなってしまった。

石巻山の中腹から山麓にかけてはシイ、クリなどが群生しているが、石灰岩地域を取りまく森林には、これらの樹木はほとんど見られず、植樹されたスギ、ヒノキなどのほかアラカシ、ウラジロカシ、コナラ、タブノキ、カヤ、アカマツなどの高木から成り立っている。

林床には、アオキ、ヤマアオイが非常に多く、キツネノカミソリ、ステゴビル、オドリコソウ、マネキグサなども生育している。

「石巻山石灰岩地植物群落」としての指定地区は、不動堂から山頂までの、約3haの小地域である。

ここには「石巻自然科学資料館」が設置されており、自然の大切さ、素晴らしさを学ぶ



石巻自然科学資料館

センターの役割を担っている。

また、石巻山には多くの陸貝（カタツムリの仲間）が住んでいる。山頂部が石灰岩でできており、カルシウムなど陸貝に必要なミネラルが豊富にあるためである。石巻山の陸貝は、種類や個体数が多いだけでなく、イシマキシロマイマイ、ミカワマイマイ、クビナガキセル、オモイガケナマイマイなど、この地方にしか見られない貴重な種も生息している。

2 豊かな湧水系

豊橋における最大の河川は、愛知県の東部を中央構造線に沿って流れる一級河川豊川である。八名弓張山地を水源とする何本もの河川がこの豊川に流れ込んでいる。石巻校区内では矢田川、三輪川、眼鏡川が流れている。

(1) 新池と矢田川

神郷地区の湯王山東光寺東部山麓にある「新池」は、この地域のかんがい用溜め池として築かれたもので、地区内を流れる矢田川の水源ともなっている。慶応から明治の初期にかけて築堤されたものといわれているが、記録焼失のため定かではない。



矢田川

近年の土地改良事業により矢田川の姿は様変わりしたが、この地の農地かんがいの一翼を担っていた。また、中流には「下ノ池」などの中間溜め池があったが、土地改良事業によりその姿を消した。

(2) 三口池と三輪川

豊川用水建設以前には、三口池は「金田の大池」と呼ばれ、地元の人々に親しまれてきた。

弓張山地の谷間を流れる三本の沢を水源とし、その水量も多く、長年にわたって金田地区や石巻本町神ヶ谷区、牛川町の一部の灌がいにも供せられ、豊橋随一の溜池であった。

築堤は、江戸時代中期の貞享年間（1684～88）と思われるが詳細は不明である。また、一説には天明年間（1781～88）とも言われているが定かではない。

この三口池を水源として、石巻山麓を西にゆるやかに蛇行しながら、三輪川が流れている。



三輪川

神田川に合流するまでの3 kmあまりの流域の途中には、かつては水深1 mを超えるような淵が数カ所にあり、魚釣り、水泳など子どもたちの格好の遊び場でもあった。

初夏には、ホタルが乱舞する清流であったが、昭和38年（1963）土地改良事業に伴う河川改修により川の様子も大きく変化した。一時は魚類、ホタル等の絶滅が心配されたが、近年水質も次第に浄化され、各種の生物が再び生息するようになってきた。

南側山麓には、眼鏡川が流れているが、この川は、三口池の導水路として造られたものといわれている。また、谷あいには「会下池」「大亀池」があり眼鏡川に注がれていた。

現在は、治山治水のため、夫々「会下砂防ダム」「大亀砂防ダム」として整備された。

水田脇を流れていたかつての導水路は、水もきれいで、フナ、ドジョウ、モロコ、シジミ、サワガニ、そして時にはウナギ等も姿を見せ、子供たちの格好の遊び場であったが、昭和38年（1963）に始まった豊川用水事業により三口池は農業・水道用水の調整池となり「新三口池」として拡張整備され、導水路は昔の姿を消した。

そして、のどかな田園風景はなくなりつつあり、一抹の寂しさを感じる。

3 自然保護と活用

これまで述べてきたように、石巻山をシンボルとして仰ぐ石巻校区は、まさに自然の宝庫である。この恵まれた自然環境を大切に守り後世に伝え残していくため、当地域は「県立自然公園」「風致地区」に指定され、これを保護するための様々な規制が設けられている。

近年、里山などを含め山林の荒廃が進んでおり、これの手入れ保全が重要な課題となっており、石巻校区も例外ではない。

様々な規制は、自然環境を守り維持するためのものであり、私たちが共有する自然環境を守る活動の指針として前向きに捉え、一人一人がそのために自分は何をやることができるか、真剣に考えることが大切である。

(1) 石巻山多米県立自然公園

静岡県との県境を走る弓張山系のうち、豊橋東北部にある中山峠一带から南部の岩屋観音に至る地域（面積 2,061ha）が、公園指定地域である。

稜線部からの眺望が優れていること、石巻山頂の石灰岩地帯植物群落や中間湿原として

貴重な葦毛湿原など、植物学上貴重なものが多くあることから昭和44年（1969）に自然公園の指定が行われた。

自然公園は、その自然環境の保全を図るため特別地域（特別保護区・第1種～第3種特別地域）及び普通地域に区分され、域内での各種行為について、それぞれ許可及び届出による規制が設けられている。

当公園は、規制の厳しい第1種特別地域に指定されている。

(2) 石巻山風致地区

「風致地区」は、大正8年（1919）の旧都市計画法の制定に伴い創設された制度で、都市における緑地の保全に関する制度としてわが国で初めてのものである。

「風致」とは「趣き」などのことで、「人に趣を感じさせる情景・場面」を「風致に富む」と表現されてきた概念である。

具体的には、樹林地や水辺地、歴史的に意義のある地区であって、良好な自然景観を形成している地区が制度に基づき「風致地区」として指定される。

風致地区は、第1種～第3種に区分され、建築物、工作物、宅地造成、土石類の採取、樹木の伐採等について、各種の規制・許認可基準が設けられている。

豊橋市の風致地区は、昭和11年（1936）に岩屋地区が愛知県内で最初に指定された。現在では、「石巻山」・「赤岩」・「葦毛」・「岩屋」・「今橋」の5つの地区が指定されている。

石巻山風致地区 昭和61年（1986）、特に良好な自然的景観の維持を図るため石巻山を中心に、石巻神社（下宮）・三口池等を含め約260haに及ぶ地域が、第一種風致地区に指定された。

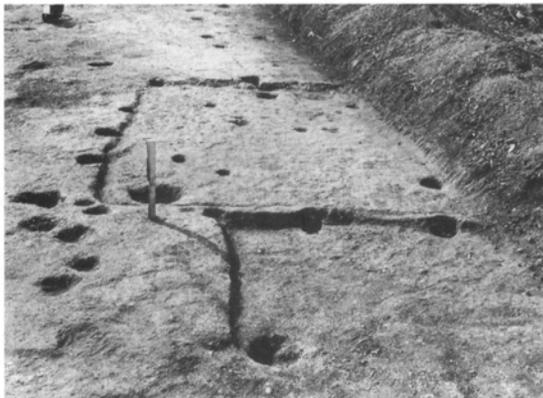
第2章 歴史と生活

1 古代の石巻校区

石巻校区は、弓張山系から西に伸びた山並みに囲まれ、自然環境に恵まれた土地柄であるため、古くから人々の生活が営まれていたと考えられる。

(1) 縄文時代

神郷遺跡には縄文時代から近世にわたるいくつかの遺跡がある。多り畑遺跡で縄文後期の土器が出土している。しかし、小片で全形を復元することはできなかった。打製石斧も2点出土している。



多り畑遺跡

(2) 弥生時代

この時代は豊川左岸が中心となっていて、この地区は、居住区としては選択されなかった。水田も少なく開発が進んだ地域ではなかったと推定される。

(3) 古墳時代

金田・神郷を囲む山麓には古墳群が確認さ

時代	石巻校区のあゆみ
原始時代	縄文時代 ・多り畑遺跡（神郷）
古代から中世	古墳時代 古墳が作られる（6～7世紀頃） ・大亀古墳群（金田の南方山麓） ・吉御婆山古墳（神郷の北方山麓） 飛鳥時代 大化の改新により国司軍司制が敷かれ穂の国に八名郡が置かれる（推定） 鎌倉時代 三河国に守護が設置される 三河国の八名郡の七つの郷として美和郷が置かれている 南北朝時代 石巻山城が築城される（推定） 室町時代 地域の通称として三輪郷を使う
近世	安土桃山時代 八名郡が池田氏（吉田城主）の領地となる 江戸時代 江戸時代当初に八名郡に神郷村、金田村が置かれている
明治時代	明治維新（1868年）により吉田藩が豊橋藩と改名 廃藩置県（1871年）により豊橋藩が豊橋県と改名し、のちに愛知県に統合される
	神郷村、金田村の合併の経過
	明治三十年 昭和三十年 豊橋市に編入

れており、古墳時代にはかなり有力な豪族がこの地域に力を及ぼしていたと考えられる。

古墳後期には、青木遺跡で竪穴住居が2軒検出され、小規模な集落が確認されている。

(豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書より)

八名郡の立ち始まった年代は確かにはわからぬが、他の郡と同時に孝徳天皇大化の改新の際と認められ、国司・郡司を置かれ、その下に多くの里を置き長を立てられたものとする、今から約1300年の昔になる。

源順みなものしたごうが作った「和名類聚抄わみょうるいじゅうしやう」に、三河国の八名郡には七つの郷がある。

その一つ「美和郷」は、今の石巻村大字三輪のうち神郷を元として、その付近の地であろう。鎌倉時代には、すでにこの地域の呼び名として「ミワ」が使われていたことがわかる。

郷とは村のことを意味しており、その後室町時代になると、この地域の通称として「三輪郷」が使われていた。

(八名郡誌より)

(4) 鎌倉時代以降

鎌倉から室町時代においては、白山遺跡で掘立柱建物ほりたてむらじが検出されている。

(5) 南北朝時代

石巻山の中腹には石巻山城の跡があるが、これは南北朝時代に、この地周辺三千町歩を支配する高井主膳正たかいしゆぜんのしょうが築いたものと伝えられている。三河の諸豪の中でも南朝方に味方した一族もあり、また、北朝を支持した一族もあって絶えず争いが続いた。

馬場遺跡では周囲に土塁を巡らせた中世の豪族屋敷跡と推測されるものがあり、山城と密接な関係がうかがえる。

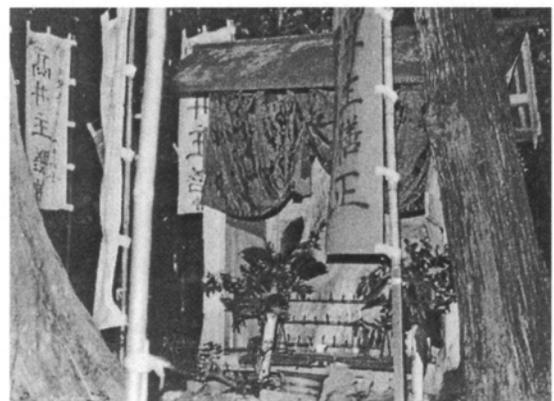
一世紀あまりにも及ぶこの動乱も、南朝方が武力的に敗北し、北朝方の天下となったこ

とから、この地方における南朝方の歴史は、史書にも見えず口碑くひ伝承にのみ伝えられている。地方史の研究で文献資料を見出すことは至難であり、当時の実情を解明することは甚だ困難なことである。

伝説によると、高井主膳正なる者この城に拠り南朝に味方し、1343年高師泰こうのもろやす・師兼もろかね兄弟と戦い善戦したが及ばず、自ら旗本の手勢を率いて石巻山の砦に立て籠もり、城攻めに堪えること半年、5月晦日の夜敵の奇襲作戦で落城、石巻山の中腹で自刃した。今もその場所を「高井殿おづる」と言う。



石巻山城趾の碑



高井殿おづる

東三河の平野を一望して遠く伊勢と連絡できる石巻山頂は、尖兵拠点としてまたない城壘であった。城将高井主膳と伝えられる高井城は、豊川の東岸に近い高台にあり、交通と戦略上の重要地点である。

(石巻村誌より)

石巻の野口氏一族の先祖は、南北朝当時高井主膳正と共に、鷹居・石巻山城で南朝方の軍勢と戦った武士で、大統宮守永親王に仕えて、北国加賀の白山から三河に来た一族である。

延元4年(1339)から半年もの長い間戦った。皐月晦日に石巻山城が落城し、高井主膳正は、嫡子与四郎と共に、石巻山の中腹で自刃、生存者は神郷で隠棲した。

七ツ塚のある所の地名を字白山といい、付近の畑から数々の土器などが出土した。地名の由来は、鷹居・石巻山合戦の時、一族の戦死者を七ツ塚に合祀したものと思われ、野口氏一族の故郷白山に因み、この地を白山と名づけたと思われる。また、一部の野口氏は血路を切り開いて神之田(金田)に辿りつき、古い松にもたれて立ち、腹を切ったという伝説がある。

(八名郡誌より)

(6) 八名郡の古城

石巻古城 石巻山腹にある。

二葉松・三河古城記には「主不知」とあり、三河誌には「石巻源太其子隼人、多米氏と同じく北条氏綱に任ふ」とある。

高井古城 石巻村大字玉川旧高井村にある高井主膳正という者、天文12年5月晦日石巻の山城に於いて討死したという。

和田古城 石巻村大字玉川村字城ノ内という所で、現に土塁を存している。また、字御所に通称古屋敷という所もある。

月ヶ谷古城 石巻村大字嵩山字上角庵、通称城山にあり、西郷正員が大永年中に之を築き正勝元正に伝え、永禄4年に至る約40年間ここに居た、所謂月ヶ谷城と言うのが之である。当地点では、月ヶ谷境に近接するが、今は旧嵩山村に属する。

その遺跡は、上角庵の城上の山頂で東西20

間、南北16間、面積320坪ばかりあって古井戸等も残っている。山嶺を伝わって山中の五本松城に通ずる一小径がある。

(7) 戦国時代以降

戦国時代を経て、豊臣秀吉が全国を統一するとこの地を含む八名郡は、天正18年の小田原役後、徳川家康が関東へ国替えとなり東三河の地15万2000石は、吉田城主たる池田輝政の所領となった。よって、本郡内もその所領となった。慶長6年には、松平家清が、吉田城主となり3万石を給せられた。

(八名郡誌より)

吉田藩では、吉田城の内堀へ水を引くこととともに、連年の旱魃かんぼつに困って、田畑のかがい用の大きな溜池を作るように考えて、尾張藩から横井宗直を招聘したと伝えられている。

三口池に関しての古文書がないので、工事の詳細についてはわからないが、吉田藩に赴任した横井宗直は、弓張山系の水源調査をなして、水量豊かな神田(金田)の奥に池を造ることに決め、更に忠興の裏に溜池を造り、そこから向山の太池へ水を引き、吉田城の内堀へと計画したもので、1660年ごろに三口池の工事などを始めたと思われる。池の工事をすすめて十年余りの歳月を経て、約三町三反歩余りの大きな三口池が完成した。

更に忠興へ溜池を構築し、三口池からの引水路と、忠興から向山の太池への引水路の工事を進めていたが、延宝6年(1678)城主の小笠原長矩公が没され、同年横井宗直も没したことから引水路の工事が中止になったものと思われる。牛川村と神ヶ谷村の境界裁定図によると、引水路は、三口池から中白の山裾を通過して、忠興の溜池に入れ蟬川の手前小鷹野の屏風岩の地先まで記入してある。その遺構は、宅地造成などにより消失して昔の面影

はないが、中白の山裾には残っている。

なお、横井宗直の補佐役として尾張藩から同道した青年武士浅井弥五衛門は、神郷大木家の娘を嫁に入れ住居を構え帰農した。横井宗直の嫡子宗益と次男の九兵衛は共に父を助け、三口池などの工事を完成したので吉田藩主から恩賞として森岡の地を賜り、貞享3年(1686)開墾を完了し、森岡新田開拓の検地を受けた。

(八名郡誌より)

美和郷は、藩政時代の神郷村と金田村、今の石巻村大字三輪であろうといわれている。神郷は、ミワであり、金田は神田であろう。大巳貴命を祭る石巻神社の山形は、大和国大神神社と全く同形であり、石巻神社が古来の式内社である事等から美和郷がこの辺りであることに疑いはない。

お茶屋橋 遠く嵩山の山地に源を発し、東光寺山麓を迂回して高井の辻川部落を過ぎ、神ヶ谷地内を貫流する神田川が、別所街道と交わる地点を「お茶場」と呼んでいる。

ここは昔、吉田の殿様が鷹狩に出られた時休息されたところで、お茶屋が設けられ、ご接待申し上げた所と言いつたされている。神田川に架けられている橋の名を「茶屋橋」と今でも言っている。

(神ヶ谷郷土史より)

(8) 明治時代以降

明治維新とそれに続く廃藩置県により、吉田藩の領地は、愛知県を構成する県域の一部となった。

明治4年豊橋県に変わったとき、県内の町村は、約500戸を単位として戸籍区に分けられ、区ごとに戸長と副戸長が任命され郷社が一社ずつ指定された。関係する戸籍区の編成は次の通りであった。

第13区は、戸長後藤九平、副戸長佐原清九

郎で、郷社は石巻神社。この区には、金田・神郷・森岡新田・高井・長楽・長彦・嵩山・神ヶ谷・月ヶ谷・和田村が含まれた。

石巻村は、明治39年(1906)7月から昭和30年(1955)3月まで、足掛け51年間存続していた。明治維新当時は20カ村から成り立っていた。庄屋・組頭・百姓代のいわゆる村方三役の下に藩の地方役人を通じて、吉田藩領主の支配にゆだねられていた。

慶応3年(1867)12月王政復古が令せられると、大坂城に詰めていた最後の吉田藩主・松平信古は、大坂から逃げ帰り、鎮撫総督府に恭順の意を表した。版籍奉還がおこなわれると、彼は藩知事の辞令を与えられ藩名は豊橋藩と改められた。廃藩置県がおこなわれ、信古は藩知事を罷免され、豊橋を去った。正徳(1711~16)以来150年間続いた旧領主松平氏と領民との関係は断たれたのである。

(石巻村誌より)

東三河の伝説物語 石巻山と本宮山が背比べをして、石巻山が負けた。以来、石巻山へ詣でるには石1つでも持ってあがれ、すると身体が疲れなると言われている。

石巻山を神山(みわやま)と言いその山麓に丹波土族の大三輪氏が勢力を張っていた。これに対抗して、片方本宮山には同じ丹波土族の穂別君(ほのわけぎみ)の治所で更に圧倒的な勢力を有していたためこの同族は川を挟んで常に血の争いを続けていたと言う。

これが石巻・本宮の背比べ説の起こりだとも伝えられている。

(乙部静夫著より)

石巻村は明治39年7月、西郷村・玉川村・嵩山村・三輪村・多米村の5ヶ村が合併して成立したもので、村の名前は中央に聳える石巻山からとった。

自治体がよりよく諸種の経営を行い得るため県の基本方針は「戸数千戸・人口五千人以

上を標準」とし、関係町村に検討させ、数次の会を重ね発足した。

(神ヶ谷郷土史より)

吉田から豊橋市へと名称が変わって一世紀私の住む石巻・賀茂地域も昭和30年(1955)4月、旧八名郡石巻村と双和村大字賀茂が編入して50周年を迎えた。過日、旧石巻村の紋章を拝見する機会に出会った。



石巻村紋章



石巻神社神紋

そこには、明治39年(1906)石巻村が成立した時、村の中央に聳える石巻山に鎮座する石巻神社にちなんで制定したもので、八葉鏡に一本杉を形どっていた。確かに石巻村大字多米を加えた地域で考えれば、中心の石巻山をシンボルと考えたのか。石巻神社の神紋も一本杉に三つの輪である。周りの山、川、野などの自然を感じたのか、100年前の先人たちが何を思い何を感じてこの紋章を決めたのか、ふと思うことがある。そして、100年、豊橋市になった現在も自然は残っており、人情味ある人々も多く住んでいる。

(近田市議談)

金田住宅

<概要>

県営金田住宅は、昭和40年代前半に約600戸が建設された。その後、平成4～13年度に

わたって良好な住環境とコミュニティの形成及び敷地の有効活用を目的とした建替え事業を実施し、現在にいたっている。

<所在地及び面積>

所在地 豊橋市石巻町地内

面積 7.7ha

<既存施設(建替え前)の概要>

第5次建替え5箇年計画			
建設年度	構造	旧種別	戸数
昭和40 ～43	簡平	旧1種	232戸
	簡二	旧2種	128戸
計			360戸
第6次建替え5箇年計画			
建設年度	構造	旧種別	戸数
昭和41 ～43	簡平	旧1種	81戸
	簡二	旧2種	178戸
計			259戸
合計			619戸

サンコーポラス石巻

<概要>

昭和46年2月、雇用促進住宅石巻宿舎として開設する。

全国の炭鉱離職用仮宿舎として、各地に建設されその一環として開設される。

平成元年3月 雇用促進住宅石巻宿舎集会所開設

雇用振興協会の規約では戸数100戸以上でなければ集会所は設置されないことになっているが、雇用促進住宅全国連合会自治会に加盟していたため、団体交渉の結果開設することができた。



旧金田住宅



新金田住宅

平成10年3月 2戸～1戸改造完工 炭鉱離職者の仮宿舎としての目的もある程度達成し、空戸も増し、2戸借りも増えるようになったため、一般の住宅として適応できるよう狭隘性を改善する策として、2戸を1戸に改造する。

これからの石巻 平成18年に示された都市計画マスタープランによると、概ね20年後を展望した土地利用、都市施設、市街地開発事業などの方針が示されている。

「笑顔がつなぐ緑と人のまち豊橋」が将来都市像である。

東部丘陵地域と表浜海岸の樹林地帯を結んだ緑の環境軸は、石巻山石灰岩地植物群落や葦毛湿原など多くの貴重な自然の保全を図ることになっている。

生活都市の前提である「笑顔がつなぐ緑と人のまち」の実現を目指し、豊富な山地、緑と水の自然環境の整備、保全、育成をおこない、人々にうるおいと安らぎを与え、快適に暮らせる空間をはぐくむため、まちの自然のシンボルとして、石巻山を中心とした弓張山地の山並みが設定されている。

2 産業の移り変わり

(1) 農業

農耕の始まり 石巻村誌によると、農耕が始まったのは弥生時代であろうと思われる。

この頃は、水田を石や木の鍬で耕し、秋には実った稲穂を石包丁や石鎌で刈り取り、素手で粃をこきおろして、木製の臼と杵でついて玄米にし、壺型の土器で蒸して食していたことが判明している。

この弥生時代から古墳時代にかけて、鉄器がどんどん普及し、いろいろな農耕具が発達していったと思われる。しかし、この時代に、石巻校区に人が住んでいたかどうかは不明である。

牛馬を使った農耕は、奈良時代に始まったという説もあるが、石巻村誌によると、石巻校区においては、明治2年(1869)に金田村で馬74頭、明治7年に馬43頭、牛1頭が飼われていたと記されている。また、三輪村においては、明治20年から30年における牛馬の飼養頭数は牛10~20頭、馬30~90頭ほどで、馬の方が3~4倍も多いとの資料もある。明治21年の三輪村の戸数は256戸であるので、まだ牛馬が非常に少なかったことが分かる。

これらの牛馬は、主に刈草や稲藁を馬小屋に敷いて堆肥をつくるために飼っていたが、明治30年代に牛馬を使った農耕が始まり、明治末期から大正の中末期にかけての労働力不足から急速に普及し、主に水田の農耕は大いに楽になったようである。

明治~大正の農産物 明治17年ごろの三輪村では稲、麦、大豆、甘藷、大根、アワ、キビ、そばなどの雑穀類が栽培されていたようである。田では、稲と麦、畑では甘藷と大根が主なものであった。

なお、この頃の三輪村の戸数は242戸、人口は1,237人、農耕面積は田78ha畑56ha位と

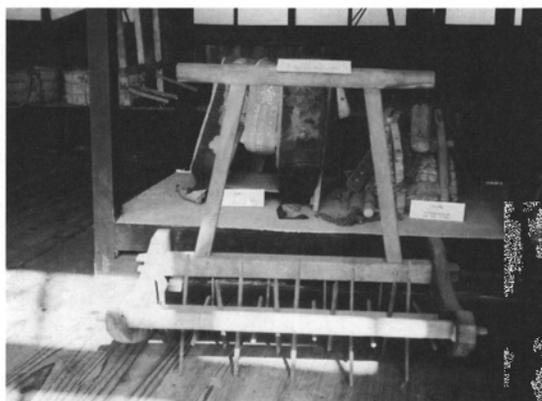
記されている。

稲作について 明治26年から37年の三輪村の米の生産状況は、作付面積80haほどで3,000俵から4,500俵ほどであって、年による豊凶の差が大きく、10a当たりの収穫量は、非常に少なかった。

大正の中期頃までは、田を備中鍬を使って耕し「振りまんが」という鉄の歯が数本ついた農具を左右に振って土を細かくし、漏水防止のため、畦の内側によく練った土をはりつけてから水を入れた。そして、人間が引っ張る「コロ」を回して土を軟らかくし、田植えをした。田植えまでに多くの作業があるが、この頃は、全部人力であったので大変な労働であった。



振りまんが



コロ

大正の中期頃から、作業や運搬に牛や馬を利用するようになり、牛車や馬耕鍬など多くの牛馬用農具が発達し、能率的な農作業がで

きるようになった。

昭和の時代の石巻校区でも、ほとんどの農家が牛や馬を飼うようになったが「ふるさと豊橋」によると、神郷では牛は「いしまき様の御使なので飼ってはならない」と言われ、馬の方が多かったようである。「馬喰」という牛馬を売買する職業の人から調教の良くできた牛馬を買い「シッ（前に進め）」「チョウ（左に曲がれ）」「ボウ（止まれ）」「右側の手綱を引く（右に曲がれ）」「手綱で尻を叩く（もっと速く歩け）」の5つのかけ声と手の動作で牛を上手に操り、田畑を耕したり、運送車をひいたりした。

稲の苗は、田の片隅に短冊型の苗代をつくり、塩水で選別して、よく充実した粃をまき田植えの時に長さ15cm程の苗を引き抜いて一握りずつ藁で縛り、これを水を張った田にばらまいてから、等間隔に目印のついた綱を左右両畦にピンと張って、大勢で横並びして苗を3～4本ずつ目印のところに植えては綱を張り植えては綱を張りを繰り返しつつ、バックしながら植えるのである。

このように、田植えの時期には、各家庭の老若男女が一斉に田に出て働く光景が見られたものである。

田植え後、幾日かでのいろいろな雑草が生えてくるので、2回くらい手押しの「オカメ」という除草農具で株と株の間を転がして除草



オカメ

するが、それでも、やや大きくなった雑草は両手で株の周囲の土を耕しながら除草する。これは、夏の暑い時期での仕事であり、大変に苦しい仕事であるが、除草と共に稲穂の本数を多くする効果があって、大事な作業である。

稲の病気で最も恐れられたのは「稲熱病」であったが、現在のように特效薬がなかったので、被害の軽重は天候に左右されたのである。

害虫で最も恐れられたのは「浮塵子」であり、防除法は竹筒に油を入れて筒底の穴からこれを散布して駆除するのである。また、その後には「メイチュウ」という害虫を駆除するために誘蛾灯が設置され、夜になると水田に点々と灯りがともり、綺麗な夜景をかもしたものである。

田の水は、土地改良の前までは大池（今の三ツ口池）、前田池、会下の池、大亀池などの溜め池が主要な水源であり、これらの池から小さな用排水路が屈折蛇行して出ており、これらから田に水を入れて、上の田から下の田へ落とすという「田越しかんがい」であった。したがって、早ばつの年には水争いが絶えなかった。

稲の刈り取りやはぎ干しは、夜なべをして去年の稲藁で「すがえ」をなべて、これで刈り取った稲株を縛り、一把ずつ「ハザ」に跨がして天日乾燥した。

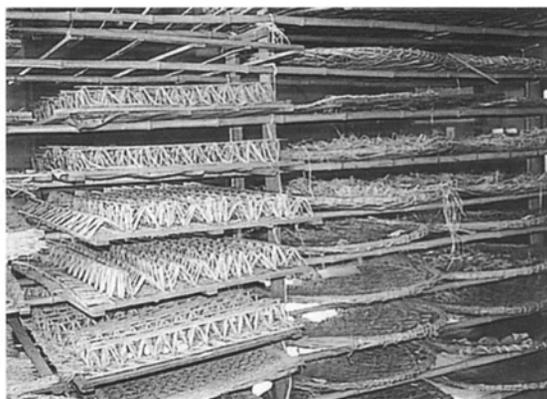
この刈り取りハザかけも大変な作業であったが、丁度、台風の時期でもあるので、稲束乾燥中に倒伏することもしばしばであった。

最後に脱穀であるが、稲穂から粃を取り離すには、弥生時代の先祖たちは素手で粃をこきおろしたが、後にたくさん並んだ鉄の歯の間に稲を挿入して引き抜く脱穀をするようになり、大正の頃には、足踏脱穀機が普及し、昭和の時代には、発動機やモーターの動力脱

穀機が使われ、今日ではコンバインで10a当たり30分たらずで刈り取り、脱穀ができるようになった。

このように、米の収穫までには、昔は多くの苦しい作業が八十八回もあったということで「米」と書くと言われている。

養蚕の発展と衰退 明治20年（1887）頃までは、養蚕はほとんど行われていなかったが、その後、わが国が生糸を輸出するため養蚕を奨励し、農家も繭が値よく売れるため畑に桑の木をどんどん植えた。



たなたけとじょうぞくまぶし

石巻村誌の資料によると、三輪村の養蚕戸数は、明治29年には28戸で全戸数の11%であったものが、明治37年には120戸と4倍に増加し、半分以上の農家が蚕を飼うようになった。

繭の値段の良い年には「繭1貫米1俵」といわれ、畑はどんどん桑畑に変わり、田を桑畑にする農家さえ生まれた位であり、養蚕は明治の末頃から昭和の初め頃まで農家が最も儲かる仕事であった。

このように、養蚕は明治の終わり頃からめざましく発展はじめて、特に第一次世界大戦中の景気の良い時に著しく発展し、昭和初期の大恐慌の時まで上昇していった。しかしながら、昭和初期の大恐慌によって、経営の小さな養蚕家は養蚕をやめていき、第二次世界大戦が起きると生糸の輸出ができなくなり、

食糧増産のために麦や甘藷を栽培するために、桑畑は普通の畑に変わり次第に養蚕は衰退していった。

世界農林業センサスによると、昭和45年には神郷に9戸の養蚕農家があったが、50年頃にはゼロとなった。

麦について 石巻村誌によると、明治26年から38年頃の三輪村の麦は100ha位栽培されていた。

田では稲、畑では甘藷などを収穫した後に種をまいて、冬の寒い時期に丈夫に育つように麦踏みや土かけを行い初夏に収穫するが、この時期は雨が多く収穫作業に苦労し、また麦の病気も発生しやすいため収穫量は10aあたり3～5俵程度と少なかった。

田では、稲刈り後の株のままでは牛耕に苦労するし、また碎土もなかなか困難であるので、手持ちの株抜き鋤で一株ずつ人力で抜いた記憶があるが、長時間を要する作業であった。



株抜き鋤

昭和20年6月19日夜、豊橋が空襲を受けた時に焼夷弾が石巻校区にも各所に落とされ、破裂して着火した油脂が麦畑で四方八方に飛び散って燃えたので、麦が焼けて全滅すると心配する人が多かったが、麦の被害は軽微であったと記憶している。

苦労多く収穫量の少ないことや農家の高齢化・兼業化などにより、麦はその後減少の一途をたどり、昭和45年には金田で約17ha、神

郷で約5haが栽培された程度であり、昭和55年にはほとんどなくなってしまった。しかし、その後農地を農協に貸す農家がちらほら現れるに及んで、農協青年部が機械で播種した麦が散見されている。

甘藷（さつまいも）について 第1次世界大戦の頃の食料増産政策で、主に畑の桑の木に代わって作付されたのが甘藷である。

石巻村誌によると、昭和17年から甘藷栽培が急激に増え、旧石巻村全体で168haあったが、昭和24年には247haとなり、大戦後の食料飢餓時代の花形作物であったが、農家の販売価格は1貫目(3.75kg)30円位と記憶しており、非常に儲かるということでもなかった。

また、菓子等をつくるために澱粉用の甘藷が普及され「食料飢餓を救って国を護る」という意味の「護国」という品種が奨励されて、各農協は澱粉工場を建設して食糧不足に備えたのであって、旧石巻農協の澱粉工場は石巻本町市場、現在の石巻高齢者活動センターのところにあった。

(2) 果樹栽培

柿 石巻村誌によると、柿の起源は旧石巻村小野田の山本鉄次氏が隣の三上村（現豊川市）の杉山又吉氏から次郎柿の苗200本の分譲を受けて、約20aの桑畑をやめて植えたのが始まりと言われている。

石巻校区に最初に植えられたことは不明であるが、石巻村誌によると昭和9年の栽培面積は金田では0.9ha、神郷では1.6haである。また旧石巻果樹組合の調査によると、そのころの出荷先は豊橋市場が65%東京市場22%、その他13%であった。旧石巻果樹組合として約107t出荷し、10kg当たり1円50銭位で売れたとの記録がある。昭和10年、供出米価が1俵10円90銭であるので、柿7箱分である。

大正11年(1922)頃、落葉病が蔓延して絶

望視されたこともあったが、当時、玉川農業補習学校長の鈴木繁尾氏はじめ多くの技術者たちの指導があって克服された。

昭和4年には、鈴木繁尾校長の尽力で「八名郡果樹組合」が設立され、その時の組合員名簿に神郷の農家が4名ほど掲載されているが、金田の農家の名前は無い。

その後、日中戦争に引き続いて昭和16年から太平洋戦争が始まり、食糧増産一辺倒の国策にしたがって柿の木を掘り取り、甘藷など食料の生産を強いられたため、柿栽培は停滞した。終戦後、昭和24年に作付け統制が撤廃され、再度柿の面積は急速に増加した。昭和29年頃から36年頃にかけて、国の施策で果樹と畜産が今後の振興すべき農業だという方針が打ち出され、果樹については昭和36年果樹農業振興特別処置法が施行されるに及んで、柿の生産に行政からいろいろの助成援助がなされるようになり「東三河の特産次郎柿」として、全国の市場で有利な販売ができ全国的にも有名な柿産地となった。

昭和32年より、金田も神郷も柿の共販体制を敷き、昭和34年から段ボール箱で出荷となり、昭和35年から石巻地区に8カ所で重量選果機による選果が始まった。金田は、今の消防屯所、神郷は今の集荷場に円形のモーター付き楕円式天号型重量選果機を設置し、組合員全員で選果、箱つめを行い、高度経済成長で校区内の農業労働力の不足状態をずいぶん緩和できた。

この方法が5年ほど続いたが、これら選果機の老朽化もあり、さらに集中した高能率な選果体制の必要性がでてきたので、昭和40年に石巻平野町日名倉に「農業構造改善地域振興事業」という行政の補助を受け「石巻農協果樹選果場」が建設され、最初は日割り当番で選果にあたった。したがって、神郷も金田も収穫した柿を「通い箱」に入れて集会所に

出しておけば、受託運搬業者が選果場に運搬するので、栽培農家は選果、出荷労力が大いに省力化できた。さらに、柿の生産は、年々増加し、既設の選果場では能力不足となったため、東三河一円で生産者800名、栽培面積500haの柿を共同計算方式による一元的出荷を実施するため、農業構造改善事業により国庫補助を受け、昭和61年に処理能力1日当たり90t、建設費約7,000万円余りで、石巻平野町字日名倉に豊橋市北部農協選果場が完成し、選果労働者はパートを使用し生産者の労力削減と厳選、大量計画出荷による市場販売の有利性を発揮した。その後石巻本町太夫橋に移転し、現在に至っている。

巨峰ぶどう 巨峰は、昭和12年に伊豆の大井上康氏が品種「石原早生」と「センチアル」を交配して作りだしたぶどうである。

豊橋では昭和27年に飯村の故武田治三郎、故磯部幸一郎の両氏が、山梨県の甲府から苗木を買ってきて、甘藷の畑に植えたのが始まりである。その後、昭和30～35年頃には飯村の他の農家はもちろん、豊橋市内、豊川、小坂井など周辺に巨峰栽培が拡大していった。

石巻校区では、金田の夏目衛氏が昭和31年頃には収穫していたが、その後数名の先覚者が昭和30年代に巨峰栽培を始め、高級ぶどうであって高価に販売できたので校区内の志ある農家に急激に普及し、昭和50年代から60年代には、校区内の巨峰組合員は40名余りに達した。

これら農家は、農協の巨峰部会に加入し、栽培技術の研修を熱心に行い、また当番制で共同選果、共同出荷を行い、特にジベレリンというホルモン処理を行って「東三の種なし巨峰」として市場から好評を博し、長野県や山梨県の種あり巨峰より早く市場出荷して有利な販売ができた。しかしながら、その後全国的に巨峰が増加するにつれ優秀品でなけれ

ば高価に販売できなくなり、また、兼業化が進むにつれて、漸次巨峰組合を脱退する農家が續出し、現在の巨峰組合員は大分減少している。

その他の果樹 石巻校区のその他の果樹としては、梨、いちご、いちじく、みかんなどを、少々の農家が栽培している程度である。

(3) 畜産

鶏 鶏は、昭和の初期頃までは、各農家に数羽から20羽程度飼育されており、自家用の卵を採り、また、多少は玉子屋に販売して家計を賄う程度であった。

戦後、神郷では数戸の専業養鶏家ができたが「卵は価格の優等生」と評され、他の物の物価が高騰するにもかかわらず、卵の価格は横這いであった。したがって、1万羽以上の大規模飼育が必要となり、また、公害問題も発生して逐次専業農家は減少し、農林業センサスによると養鶏戸数は、昭和45年6戸、50年4戸、55年2戸、60年1戸となっており、現在もこの養鶏家は頑張っている。

豚 豚は、明治期から飼育が始まったが、昭和になって急激に増加し、校区内の大半が数頭位ずつ飼育し重要な副業となっていた。

石巻校区の養豚戸数は、農業センサスによると昭和45年60戸、50年37戸、55年30戸と漸減し、平成12年には金田のみ4戸となっている。これは、養豚農家の高齢化、飼料の高騰が原因であろうと思われる。

金田の酪農家は、農業センサスによると、平成2年まで4戸程であったが、現在ではゼロである。これも、酪農経営の諸条件に厳しさが増したためであると思われる。

(4) 農地改革

農地改革は昭和20年に太平洋戦争が終戦を迎え、日本がアメリカの占領下におかれた時

に行なわれた農地の地主とその農地を借りる小作人の関係を改めた農地保有制度の改革である。

従来は農地をたくさんもっていても、その一部または全部を自作せず、農地を持たないか少ない小作人に貸し付けて農地の貸し付け料（小作料）を徴収するという地主と小作人の関係が続いていた。

従って地主が一方向的に小作料を値上げしたりまた不作の年が続いた年は小作人の不満が高まり全国的には農民一揆が頻繁に起きていた。

特に戦争中の農民の徴兵とか、敗戦後の農産物の過大な供出や納税負担への小作農民の不満は大きかったので、アメリカはこの不満を和らげ占領政策を安全にするために、日本の農地改革を行なったとの説もある。

農地改革の内容は地主が小作人に貸している農地は国が買い取ってこれを安価で小作人に売り渡した。その結果いわゆる「おゝや」と小作人の関係は消滅し、農地所有規模が平均化し小作人の発言権も高まった。

石巻校区でも多数の地主がこの改革で農地を手放したので、「農地改革で農地を取られた」との声がしばらく続いたものである。

(5) 土地改良

金田の土地改良 土地改良は、昭和24年に施行された土地改良法に基づいて行われた。金田を主体に石巻本町の神ヶ谷や牛川の一部を含めて農地の区画整理や農道とか排水路を整備して、やりやすい農業を行うため、昭和38年ごろ「石巻土地改良区」を設立して、土地改良事業を行った。

土地改良前の金田の溜め池は、三口池、前田池、会下の池、大亀池の四池があり、その規模は下表のとおりであった。

この表の通り、三口池は全体の80%程度を

かんがいしており、池には鯉や鰻の稚魚をいれて育った頃には町内で「大池鯉すき大会」が開催されて、家族総出で楽しんだものである。

用排水路は三口池から出て石巻山麓を西に流下する三輪川に入り、その他は小川が数本ある程度であったが、いずれも断面不整で屈折蛇行し、用排水能力は不十分であったので田のかんがいは上の田から順次に水を流すいわゆる「田越しかんがい」を行っていた。

池	堤長	堤高	水量	かんがい面積
三口	180m	7 m	60	49ha
前田	20	3	7	8
会下	20	3	3	4
大亀	60	2	1	0.20

(水量単位：千m³)

田畑は不整形で一枚の面積は小さく、農道は牛車がやっと通れる程で狭く湾曲しており耕耘や運搬に不都合な状態であった。

このような農業基盤を改良して金田の農業を近代的なものに改善するため、当時の先輩達は幾夜も相談し、土地改良について大方の農家の賛同を得て「石巻土地改良区」を設立して土地改良事業を断行した。事業費は行政機関から補助を受けたが地元負担を少なくするために金田住宅を誘致するなど、いろいろな手法を取り入れて土地改良事業を実施した。そして現在のような整然とした農地、農道、用排水路が出来上がったのである。

昭和40年三ツ口調整池が完成し昭和41年にかけ県が石巻町字上浦に縦25.5m、横18m、深さ1.8mのファームポンドを造ると共に三



三ツ口池平面図

買収、補償がなされ、一切の権利は公団に移ったのである。

神郷の土地改良 昭和58年10月3日の神郷区総会で農免道路建設の説明会が開かれ、豊橋市からは道路建設課長等6名、北部土地改良区理事長が出席した。

当時計画されていた東三河環状線道路とは別にこの農免道路の計画があり、神郷地区の参加によりこれを基幹として区内東西を縦断する主要な道路をも整備すれば、地域の発展を促すとの展望の説明で、参加した区民は賛成して反対は皆無であった。

故に神郷区はこの集会を土地改良事業への参加の機会として、すみやかに役員を選出のため選考委員会を設置しその委員の認定により18人の役員が決定した。

10月19日から今泉測量事務所により地区界の調査がされ、12月から土地改良実施について区民の同意印を取った。

昭和59年1月から換地・評価・補償の各係は毎日出勤して事務処理を熱心に進めた。

3月31日には区総会から土地改良の総会に



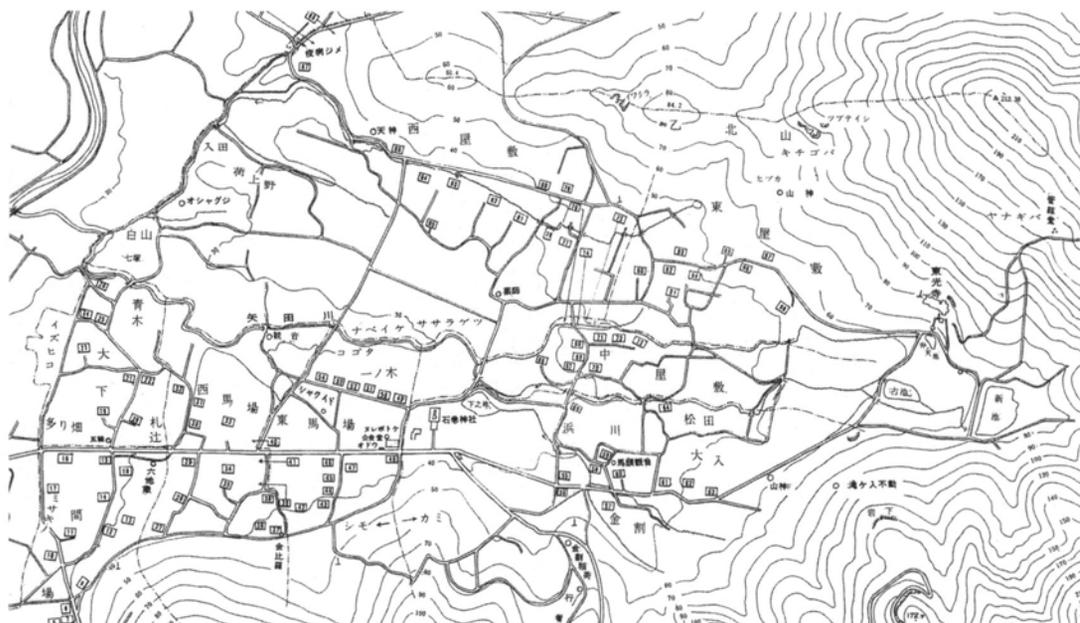
三ツ口池全景

移行して議案審議の結果、意見の相違があり一部の区民から現役員への批判の発言があったが、事業継続は承認された。

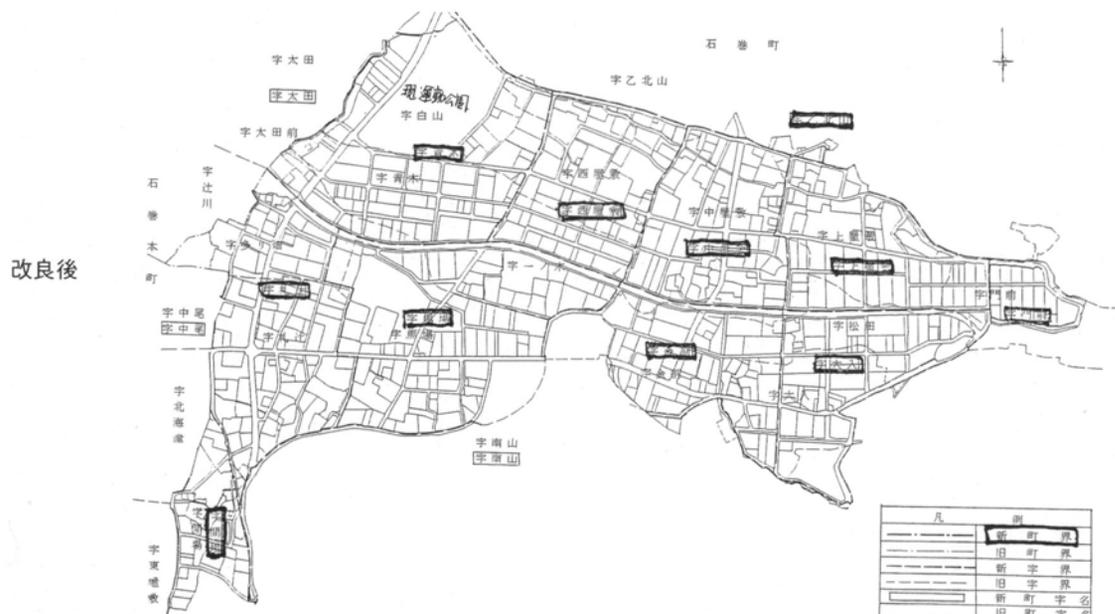
4月には東光寺の晋山式の準備でこの不満解消の検討は一時頓挫した。

6月10日土地改良の第3回総会では多くの再検討項目があったが、工事の進捗は容認された。8月には工事の詳細について各組別に集会を行い土地改良の諸問題点について、区民の意見を聴き、また内容をよく説明し認知の徹底を図った。

この間河川改良は県砂防工事での実施を陳



改良前



改良後

情し8月下旬に県の認定があった。

工事は収穫後の11月5日着手した。しかし工事区域にブルドーザーが入ると工事反対の区民の激しい抵抗があり、11月13日から3日間工事を中止した。根強い意見の相違者との対立を思い知らされたものである。

事業頓挫の危機に立った役員会では連日連夜に小委員会を開きその打開に腐心したが事態の建て直しには役員の再構成をせざるを得なかった。

新役員は工区長3名、副工区長5名で、他の役員は継続の案が12月4日の第4回総会で承認され、また、工事の再開も承認され、ようやく全面的に土地改良が推進された。

しかしながら、土地改良と区画整理が同時に進むため耕地は原形をとどめぬ程変容したので工事進行につれ、いろいろの問題が噴出し、役員はその対応に腐心、苦慮しなげらなかつた。

事業推進に混迷をしながらも、昭和60年5

月24日には田の仮換地発表、上部工事は完了し下部も昭和60年11月に完了したが役員会の残務はなお引き続き昭和61年4月2日ようやく換地総会が開催された。

昭和63年には元の字の「白山」の余剰地が豊橋市の運動公園敷地として豊橋市開発公社に売り渡しが決まり土地改良の工事費の捻出にめどがつき、平成元年9月には土地改良記念としての「神郷公民館」「神郷生産物出荷場」が落成した。

＜神郷土地改良の基本的計画＞

(土地面積)		
① 公簿面積	71町歩	
② 実際面積	75 "	
③ 潰地面積	10 "	
	(内5町歩は純余剰地)	
④ 公共減面積	6町5反	
	(宅地、導水路)	
⑤ 田畑等面積	57町1反	
	(減歩対応面積)	
(減歩率)		
	畑38.6	田12.0
(借入枠)	6億5千万円位	
(入金分)		
農免道路	1町7反分	} ×1千万円 =2億9千万円 =4億円
石巻60号線	4反	
矢田川	1町8反	
余剰地	4町×1千万円	

(6) 米の減反政策

昔は米や麦などはわが国民の大切な食糧であって一粒なりとも粗末にすることは許されなかった。

自然災害の不作、飢餓等による米の買い占めなどにより米の供給が不安定となり、度々大きな社会不安をもたらしていた。

そこで国は昭和17年に「食糧管理法」を制定して、農家は自家保有米以外は全量を国の定めた米価で国に売り渡し、消費者は国の定めた価格で配給を受けるという食糧管理統制制度を確立した。

したがって、国は当然赤字となるが、これは税金で穴埋めする「食糧管理会計」の運用を行ってきた。

戦災復興、高度経済成長等わが国民の生活が豊かになり、西欧の食生活が普及し米の消費が減少し国の食糧管理予算が膨らんできたので、国は昭和45年度から「米生産調整対策」を始め、この政策は平成15年度まで34年間余も永く続けられた。

この減反は国が毎年稲の作付け減反目標を定めて県、市、農協と順次目標が指示されて最終的に農家に指示された。

減反を達成できない農協は各種の事業で行政機関の補助が受けられないというペナルティがあるため、減反を強力に推進する仕組みになっていた。

したがって収穫前に刈り取る「青刈り」までさせて目標達成をはかった例もあるが幸い石巻校区ではかような苛酷なことはなかったようである。

減反政策を進める一方で外国からの米の輸入攻勢や農家の高齢化、後継者不足など深刻な農業情勢を改善するため、米の生産や流通の仕組みに市場原理を反映させた制度にするため、昭和17年以来続いた「食糧管理法」を廃止して平成7年11月に新食糧法が施行された。

これにより米も野菜や果物と同様に自由販売となり美味しく安全な米を低コストで生産できる農家はよいが、できない農家は低米価に悩まされる時代となった。

(7) 商工業と観光

商工業 商業については、金田の野口屋商店が、明治の初期に雑貨商を開業し、たばこ、塩、酒類、切手、印紙、調味料など、逐次品目を拡大した。金田の人々の必需品は大体揃っている、今も町内の老舗となっている。特に記憶にあるのは、村内唯一の商店であったので、村人達の格好の交流の場であったということである。

酒好家は店内の床がまちに腰を掛けて互いに酒を酌み交わしながら、また買物客同士が店の主人をまじえて色々とコミュニケーションを図っている光景が思い出される。

その後、土地改良事業が完了し、昭和42年～昭和44年頃金田住宅団地が誘致され、町内の消費者が激増したこともあって、昭和30年代末期から40年代初期にかけて、ファミリーマートカネツ・カネヤス・ツツキ酒店・小笠原商店ヤマサ食堂などがそれぞれ開店した。

また美容、理容では昭和40年代にフジ美容室・金田美容室・小山理容館・ヘヤーサロンオカモト・久米理容店などが開業した。

金田の製造工業については、昭和40年代にマツイ製菓が菓子工場を創業し昭和56年頃からカメラの部品を製造するマツイ精密が引き続き創業していたが、現在はマツイ株式会社^{マツイ}が自動車の部品の製造を行なっている。

神郷の商工業については、間場に相田屋・馬場の公民館の前に杉坂屋が戦前から雑貨商を営んでおり、神郷の住民はもとより隣接の町内の人々からも、重宝な店としておおいに繁盛した。昭和の末期に、相田屋は閉店したが、杉坂屋は現在も住民の身近な店となっている。

神郷の土地改良中の昭和の末期頃から「ほっとい亭」「喫茶ひまわり」「茶房聖リサイクルショップ飯田商店」「飯田美容室」「ジェントリー」などが開店し、それぞれ特色ある店

を営業している。

工業関係では、石巻登山口近くに沢田工業所、乙北山に三栄建材、サカイ工設などがある。

観光 石巻山の旅館は、今は石山荘とナツメ別館の2軒のみである。

しかし、昭和40年代から60年代の最盛期には旅館と売店を合わせて8軒程が軒をつらねて賑わっていた。

昭和30年代初期に石山荘が開業したが、当時は部屋数も少なく、電気もなかったので夜はランプを灯し、宿泊客の料理も隣校区の仕出し店から取りよせたとの事であり、勿論上水道の設備もなかったようである。

創業当時は豊橋市の観光課も三河湾から豊川方面まで展望でき、また夜景もきれいな石巻山の観光地化に力を入れ、桜の季節には春まつりの雪洞^{ほんぼり}を取り付けるなど振興策がとられた。

全盛期の旅館群は、豊橋まつりのアドカーパレードにも参加しまつりを盛り上げると共に石巻山旅館組合のPRに努めていた。

この全盛期、売店賑栄荘経営者の松井勉氏の作詞による歌謡曲「石巻山旅情」歌手英四郎が発売されたりしておおいに賑わいを添えたものである。

神郷から登る石巻山への車道は、昭和30年代に陸上自衛隊豊川駐屯地の隊員により建設されたが、その後拡張されて、現在は県道347号線として整備されている。

バス路線も、昭和40年代には金田住宅から石巻神社まで延長され、一時は石巻山の旅館街までの延長も検討されたようであるが実現せず、現在は金田住宅までとなっている。

第3章 教育と文化

1 石巻保育園のあゆみ

(1) 三輪保育所の開設

昭和27年5月に、三輪校区に保育所を設置してはどうかという機運が高まる。

そこで、7月に準備委員会を結成し、先進保育所の視察が行われ、8月に、野口知氏を建設委員長、野口幸作氏を副委員長として保育所設置に向けて動き始めた。費用の捻出については、共有林の木材を売却するというこ^とで意見の統一を図り、東三乾蘭事務所の寄宿舎を買って改造することになった。

昭和28年1月に、東三乾蘭寄宿舎の取り壊しを村人総出で始め、12カ月間かかり古材全部の運搬(牛車使用)を終えた。同2月に、玉泉寺の敷地である三輪小学校西側の山を崩し、地鎮祭を行う。

同4月上棟式、5月落成式が行われ、翌年5月に三輪保育所が開設された。



昭和29年 三輪保育所開設

- ・園長 野口 知
- ・住所 八名郡石巻村大字三輪字寺前14
- ・幼児 80名

・運営 運営委員により経理運営を行う。

当初、80名で開設したが、34年ごろまでは農村人口減少のため、幼児数も減少していった。昭和32年では、幼児数50名であった。



昭和30年 第1回卒園児

(2) 石巻保育園と改称

昭和30年3月1日豊橋市に合併のため、三輪保育所から石巻保育園と名称を変えた。

- ・昭和42年、豊橋市社会福祉協議会が経営主体となる。幼児数は90名である。
- ・昭和42年、県営金田住宅300戸が建設、翌年200戸が、幼児数は、150名となる。
- ・昭和44年、県営金田住宅が新たに建設され、200戸増える。
幼児数は、210名となる。
- ・昭和46年、社会福祉法人(石巻、嵩山、みどり、賀茂保育園のグループ法人)北部事業会となる。

新たに理事長職が設けられ、新理事長に、野口知氏、園長も野口知氏が兼任した。その後、杉浦重治氏が園長となる。

(3) 石巻保育園移転

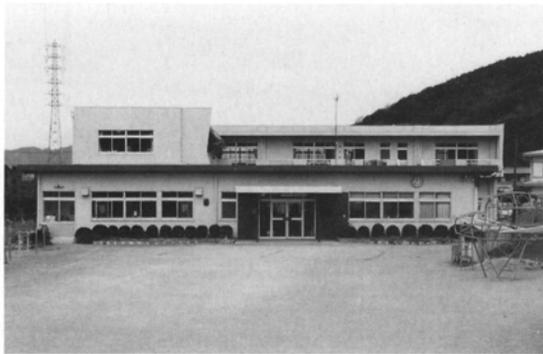
昭和47年11月に、園児数が増加したこともあり金田共有地移転地鎮祭を挙げる。

- ・昭和48年、園舎を改築する。

敷地面積	235,900m ²
管理棟	20,400m ²
保育室棟	77,440m ²

この頃の園児数は、250名である。

5月に、豊橋市石巻町字奥屋敷10に移転し入所式を行う。



昭和48年 移転

- ・昭和57年4月、園長に野口知子氏が就任する。
- ・昭和59年12月、岡本康男氏が理事長となる。園児数は、200名である。
- ・昭和60年、園児数は160名である。
- ・昭和62年、園児数は120名である。
- ・平成4年頃から、外国籍の園児の入園が始まる。(当時は2名)

同じ頃、県営金田住宅の建て壊しが始まる。以後平成15年度まで継続する。

- ・平成5年、園児数は90名である。
- ・平成6年9月9日、岡本康男理事長逝去のため退任となる。
- ・平成6年9月10日、岡本康男氏に代わって香村勝氏が理事長となる。
- ・平成12年4月、野口知子園長に代わって豊田浩子氏が園長に就任する。

同年12月、香村勝理事長に代わって丸地清氏が理事長に就任する。

- ・平成14年12月、丸地清理事長に代わって兵道政明氏が理事長に就任する。
- ・平成15年4月開園50周年を迎える。

(4) 遊戯室増改築

平成15年8月から平成16年3月までの間、遊戯室の増改築工事に着手する。

- ・構造 鉄筋2階建
- ・規模 敷地面積 2,359m²
増築 遊戯室・職員室
保育室・給食室
改修 給食室

- ・総事業費 158,495,000円

- ・施設内容

- 1階 乳児室、ほふく室、沐浴室、調乳室、事務室、休憩室、倉庫
- 2階 遊戯室、倉庫、便所
設置プール



新しくなった石巻保育園

石巻保育園園歌

作詞：野口 知／作曲：池田 譲

- いしまきやまに おひさまのぼり
かわいいことりが うたっているよ
ぼくも わたしも おててをつなぎ
みんな なかよく あそびましよう
たのしい いしまき ほいくえん
- みどりのおやま はなさくおにわ
そらにはぼっかり しろいくも

ぼくも わたしも あのそらあおぎ
 みんな なかよく うたいましよう
 たのしい いしまき ほいくえん
 3 にこにこやさしい せんせいかこみ
 にこにこげんきな みんなよいこ
 ぼくも わたしも いっしょになって
 たのしく たのしく あそびましよう
 たのしい いしまき ほいくえん

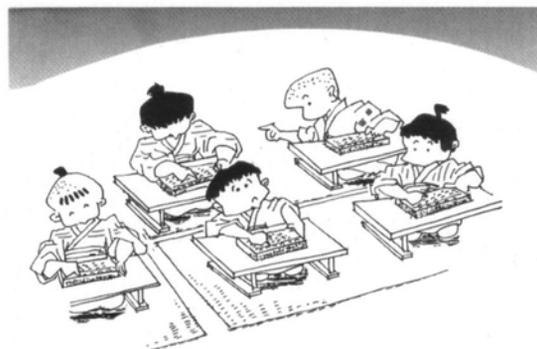
2 石巻小学校のあゆみ

(1) 八名郡第9中学区40番小学神ヶ谷学校

明治5年(1872)学制発布の主旨に従い、隣区玉川字神ヶ谷と合体して学制を敷き、各1年ごとに、神ヶ谷の興福寺と金田の玉泉寺とを校舎に当て教授する。



興福寺寺子屋想像図



玉泉寺寺子屋想像図

(2) 八名郡第34番小学三輪学校

明治12年、八名郡第9中学区40番小学神ヶ谷学校を八名郡第34番小学三輪学校と改称する。

- ・明治13年4月、三輪字寺前14番地のうち、一部を借り受けて校舎を新設する。

校名と校章(三輪について)

三輪学校の校名の起こりは、今から1000年程前にできた、日本の最も古い辞典である「和名抄」という本に、八名郡に美和郷という地名が記されており、石巻山の麓のこの辺を、昔、美和と称したため、明治の初め神郷と金田を三輪村とも言った時代があった。

校章の3つの輪は「1つは自分で1つは親であり1つは先生である。この3つの輪が相和してこそ人間が完成されるのだ」と当時の校長からたびたび教えられた。

藤原彦人氏

- ・明治15年から、高等・中等・初等の3等に分けて、高等科4学級、中等初等科各6学級として教授する。
 - ・明治20年、尋常高等を区別し、尋常科を4学級と改め同時に補習科を附設する。
- 明治20年3月、各町村に自治制を発布することにより、神ヶ谷は玉川学校に合併することになる。

(3) 八名郡三輪村立尋常小学校

明治21年に、八名郡第34番小学三輪学校を八名郡三輪村立尋常小学校と改称する。

- ・明治25年4月1日に、尋常科4学級を合わせて2学級とする。
- ・明治33年、補習科を廃止する。
- ・明治34年4月1日、尋常科2学級を3学級とする。

明治36年ころの思い出

私たちの学んだ三輪尋常小学校は、石巻山の南麓の高台で玉泉寺の隣に位置し後にはひのきの森林がおい茂り、前には三輪川の清流が流れ、教育環境の極めて良いところにあった。教室は2つ、職員室と茶番室4部屋だけだった。

当時はお茶番といって、父兄が毎日交替でお茶をわかしにきてくれた。井戸はないから、もちろん飲料水は玉泉寺からもらい水をした。掃除の水は、前の三輪川までおりて汲んできた。

明治36年4月1日、1年生に入学した私どもは、男13人、女6人だった。先生は、たったの2人だけだった。

当時の校長は高橋千人という方で、私が2年生の時退職され、嵩山から高藤清作校長が来られ、以来21年間奉職され、三輪尋常小学校の基礎をかためるべく、一意専心その道に精進された名校長であった。

野口 知氏

- ・明治37年4月1日、尋常科3学級を2学級とする。

明治39年7月1日、町村合併問題実施の結果村名石巻村と改まる。続いて、明治40年2月限り一度廃校となるが、3月1日より従前のとおりとなる。

(4) 八名郡村立三輪尋常小学校

明治40年、八名郡三輪村立尋常小学校を八名郡村立三輪尋常小学校と改称する。

- ・明治41年4月1日義務教育が6カ年に延長のため、第5学年が新設され、尋常科2学級が3学級となる。
- ・明治42年4月1日、第6学年が新設されることとなった。ただし、学級は従前通り3学級である。

- ・明治45年1月より、校舎改築・敷地拡張の協議が始まる。
- ・大正元年10月8日、落成式が行われる。
- ・大正6年10月、西校舎を修繕する。外側をガラス戸とする。物置場を新設する。
- ・大正7年4月1日、尋常科を4学級編制とする。(第1・2学年を単式とする)
児童数は、193名である。
- ・大正8年、農業補習学校を附設する。
- ・大正9年4月1日、3学級編制とする。
- ・大正11年12月、井戸を新設する。
- ・大正14年、井戸屋・足洗場新設する。

(5) 八名郡石巻村立三輪尋常高等小学校

大正15年4月1日、八名郡村立三輪尋常小学校を八名郡石巻村立三輪尋常高等小学校と改称する。

- ・同年、高等科を併置する。
- ・昭和2年3月、井戸を修繕する。

1年生のころの思い出

私たちは、大正15年4月1日に入学した。私たちは、2年生と一緒に教室でハナハトマメマスと石板に石筆で書いては消し、消しては書いた。1つしかないオルガンを教室から教室へ運び、歌を歌った。同年、12月25日に天皇が御崩御になられ、1年間喪に服した。

冬の体育の時間は、みんな着物に藁草履だった。裏山から石巻山へのかけ足はよい体力づくりだった。当時は、木立も小さく、道中の眺めのすばらしかったこと、夏は、学校前の川で汚れた手足を洗いながら膝小僧まで水に浸かって、足元に寄る魚と戯れたものである。

「昔を今になすもよし」と、懐かしく思われる。

野口三紀枝氏

6月、校舎北側の廊下にガラス戸をはめる。

最初の給食調理員

三輪小学校といえば、先生も児童も少ない複式の小さな学校だった。

運動場の南側には、桜の木がたくさん植えてあり、春になると満開でみごとだった。また、ポプラとプラタナスの木が天を突くように何本も立っていた。

学校給食は初めはミルクだけだった。脱脂粉乳を泡立機でかき回し「スイノ」でこし、プツプツが無くなるまで何回も繰り返した。

調理室が改造され、完全給食になったが、材料と薪は保護者から集めた。材料は、同じような物ばかりが集まり、給食係の先生は大変苦勞された。

次第に、材料も全部買うようになったが、仕事はなかなかはかどらず、用務員さんに大変お世話になった。

昔から井戸水が少なかったので、モーターで汲み上げると、昼過ぎには砂を汲み上げるようになった。そこで、児童にバケツで運んでもらったり、リヤカーにバケツ6個をのせ、2つのハソリと水槽がいっぱいになるまで運んだ。

苦しかったことばかりの生活だったが遠足で潮干狩りなどして、楽しかったこともたくさんあった。

中村光代 氏

- ・昭和3年4月、昇降口土間のタタキを修理する。
- ・昭和4年1月、昇降口西側に板を張る。事務室南側に、5坪ひさしを設ける。
- ・昭和11年4月、玄関6坪を部屋とする。
- ・昭和14年3月、職員室南側のガラス戸を取り替える。

(6) 八名郡石巻村立三輪国民学校

昭和16年4月1日、八名郡石巻村立三輪尋常高等小学校を、八名郡石巻村立三輪国民学校に改称する。

- ・昭和18年4月、職業科を附設する。
- ・昭和19年4月1日、5学級となる。
- ・昭和21年、初等科は単式、高等科は複式となる。

(7) 八名郡石巻村立三輪小学校

昭和22年4月1日、八名郡石巻村立三輪国民学校が、八名郡石巻村立三輪小学校と改称する。

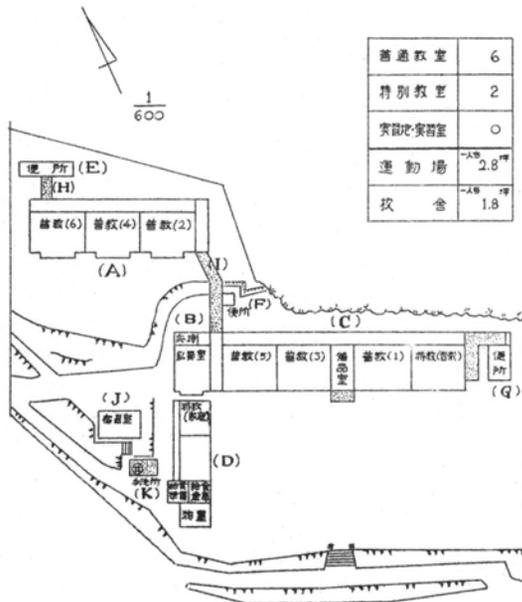
- ・昭和23年4月1日、学制改革により、小学校6年制となり、6学級となる。
- ・昭和23年10月、給食場を改造する。
- ・昭和25年8月、宿直室を新築する。
- ・昭和26年2月、完全給食となる。
- ・昭和27年9月16日地鎮祭、10月28日起工式、11月27日上棟式が行われる。
- ・昭和28年1月28日、新校舎落成式が行われる。

校舎	79.30坪
職員室	22.45坪
職員便所	1.00坪
生徒便所	6.25坪
渡り廊下	8.72坪
生徒便所・渡り廊下	2.00坪
合計	119.72坪
請負金	2,890,000円

(8) 豊橋市立石巻小学校

昭和30年3月1日、豊橋市に合併となり八名郡石巻村立三輪小学校から、豊橋市立石巻小学校と改称する。

豊橋市立石巻小学校校地校舎平面図



昭和30年12月当時の平面図

この平面図に示された〔J〕は昭和25年度に建設「D・K」は明治13年建設、「C・G」は大正元年に建設、その他は昭和28年に建設されたものである。

豊橋市に合併した昭和30年12月1日に、石巻小学校は「D・K・G・C」について改築の要望を行っている。

- ・ D・Kについては、老朽不備の校舎にて完全な学校給食もできず、また、家庭科指導上からも是非改築を要する。
現況では、校庭に小型自動車さえ入れず、改築の場合は職員室南側を採光上からも5メートル以上あげる。
- ・ Gについては、児童便所としては極めて不衛生・不完全にて早急に改築をお願いする。
- ・ Cについては、校舎の設計悪く、特に採光の点において、地形上の悪条件も加わり極めて暗く、雨・曇天の場合の授業が困難である。

このことから、豊橋市に合併して新しい

学校づくりに向けての意気込みが感じられる。

- ・ 昭和30年、校章を制定する。



昭和30年入学1年生

- ・ 昭和34年、テレビを設置する。
- ・ 昭和35年1月、石巻小学校の校歌を制定する。

石巻小学校校歌

作詞：松井庄蔵／作曲：松井昭年

- 1 明けゆく山に 霧晴れて
窓のみどりに 鳴く小鳥
光あかるい 学び舎に
ぼくもわたしも 胸張って
みんな元気に 学びます
楽しい 石巻小学校
- 2 谷の流れの すみとおり
やさしく歌う 美和の里
清らかな丘の 学び舎に
ぼくもわたしも 肩組んで
みんな仲よく 励みます
楽しい 石巻小学校
- 3 雨にも風にも たえてきた
大きな榎の木のように
心とからだを きたえつつ
明日の日本を 担うため
強く正しく 育ちます
楽しい 石巻小学校

- ・ 昭和35年理科教育研究指定校となる。
- ・ 昭和35年、学校林が誕生する。

学校林の概要

昭和35年、地元石巻町と営林署は、分収造林の契約を結び、これを石巻小学校の学校林として提供してきた。

学校林は、面積約5haで、学校から裏山の方に歩いて15分ほどの石巻山一帯に広がる国有林の中にある。

当時、石巻町の人と、児童・PTAの手でクロマツとヒノキを植林し、以降、地元の役員を中心に手入れされてきたが時には、下草刈りなどの作業に児童も参加し、貴重な体験学習となっている。

現在は、生活科、総合的な学習の時間等の学習、石巻大作戦のコースとして活用している。

- ・昭和36年11月、理科研究発表会を開催する。
- ・昭和37年「花いっぱい運動」で入賞する。
- ・昭和40年1月8日、校旗が完成し、受入式が行われる。(40,000円)
- ・昭和40年4月校舎改築推進委員会の決議により新校地を金田町西浦地内とする。
- ・昭和41年6月1日、起工式が行われる。
- ・昭和42年1月26日、竣工となる。
- ・昭和42年3月9日、祝賀式が行われる。

<校舎>

総面積	1,766,782m ²
本館	708,000m ²
校舎	969,912m ²
渡り廊下	81,000m ²
ポンプ室	6,000m ²
浄化槽動力室	1,870m ²
工事費	46,140,000円

新校舎完工に伴い、旧校地は玉泉寺に返却して借地契約を解消し、校舎は取り壊した。

(9) 石巻小学校移転

昭和42年2月3日、石巻町堀合2番地に鉄筋2階建ての新校舎が完成したので、移転する。



移転当時の写真

新校舎への引っ越し

新校舎への引っ越しは大変なものであった。まず、高学年が掃除と床にワックスを塗るために出かけた。ワックス塗りができたところで、1年から6年までの一人一人が、自分の机や腰掛けを持って休み休みしながら、アリの行列のようにして新旧の校舎を往復した。

PTAの方々は、自動車、リヤカー、耕耘機に戸棚や器具を積んで運搬した。庭木や岩石も運搬しなければならなかったもので、これも大変であった。

旧校舎から新校舎への移転一切について、8名の職員が協議を重ね、それぞれ当日は手分けをして部署につき、汗みどろの労働であったが、児童・PTA・学校職員三者が一丸となつての世紀の移転であった。

元校長 山本 強 氏

- ・昭和42年11月30日、体育倉庫を建築する。
- ・昭和43年4月1日学級増に伴い保健室、家庭科室を普通教室に転用する。
- ・昭和45年4月1日、学級増に伴い、図書室も普通教室に転用する。

5月26日から普通教室3、準備室1、階段、塔屋を増築する。

- ・昭和46年4月20日、普通教室3を増築する。
- ・昭和47年7月18日、プールの竣工式やプール開きが行われる。

11月25日、理科室1、音楽室、普通教室1を増築する。



新しく建設中のプール

- ・昭和49年3月5日、体育館新築、普通教室3を増築する。



新しくできた体育館

- ・昭和53年～54年まで、学級経営の研究指定を受ける。
- ・昭和58年10月15日、普通教室3を増築する。
- ・昭和59年生徒指導の研究指定を受ける。
- ・昭和60年12月1日、屋外便所ができる。
- ・昭和62年12月3日、プール管理棟ができる。
- ・平成元年、同窓会より3階壁面に校章を設置する。

- ・平成2年9月4日、北校舎大規模改修工事が終わる。

学校西側に、スクールゾーンを設置する。

- ・平成3年、北校舎外装塗装工事が行われる。

岩石園を移動する。

P T A学校花壇をつくる。

- ・平成4年度、北校舎大規模改修（内装）が行われる。

焼却炉を新設する。

- ・平成5年、大型木製遊具を新設する。

小鳥小屋移転新設する。

- ・平成6年、運動場を全面改修する。

プールに温水シャワーが設置される。

- ・平成7年、プールろ過装置の取り替え、テレビ配線工事が行われる。

- ・平成8年体育館の塗装工事が行われる。

保健室に空調設備が取り付けられる。

- ・平成9年、プール改修工事が行われる。

- ・平成10年、体育館照明器具改修工事が行われる。

大時計配線工事が行われる。

- ・平成11年、南北校舎間コンピュータ配線工事が行われる。

- ・平成12年、コンピュータ室整備工事が行われる。

- ・平成13年度、プールサイド補修工事が行われる。

体育館大時計配線工事が行われる。

- ・平成14年度、校舎南側強化ガラス取り替え工事が行われる。

なかよし学級が新設される。

- ・平成15年度、コンピュータLAN工事が行われる。

プールろ過機の取り替え工事が行われる。

- ・平成16年下水道の切替工事が行われる。

- ・平成17年、2学期制が実施される。

明治5年に、現在の石巻小学校が産声をあげ、本年度で133年を迎えることになる。

(10) 石巻小学校の特色ある取組

それいけ石巻大作戦 石巻大作戦は、児童が学校林を始め、校区内や石巻山自然観察コースを歩くことを通じて、郷土の理解と愛情を深め、自然を大切にすることを養うとともに、みんなの力を結集し、行動する中で、判断力、注意力、観察力を育てることを目的としている。



それいけ石巻大作戦

石巻大作戦の歴史は古く、昭和46年の学年単位での山登りに始まる。この時は「魅力ある石巻山に登ろう」と、児童・職員・保護者も参加しおにぎりを持って出かけたという。

昭和50年度、青少年赤十字への加盟を機会に、4年生以上の児童による「石巻登山フィールドワーク」が行われた。最初は、チェックポイントが1～2箇所の簡単なもので、体力づくりとリーダー養成が目的であった。

昭和54年度には、この方法を見直し「それいけ石巻大作戦」と名付けるとともに、通学団の縦割り集団を活かした全校児童参加の形式で実施した。

そして、平成6年度には、初めて全校児童が石巻山の山頂に挑戦し、踏破した。

平成8年度のそれいけ石巻大作戦は、チェックポイントに「森林のおじさん」が初登場

し、学校林のことや森林のことについて質問した。現在もポイントの一つとして活用している。

なぎの木農園 現在、学校が借用中の農園名である。

「なぎの木」は、玉泉寺にあり、昭和32年市の天然記念物に指定されている。

なぎの木ということばは石巻小学校を象徴することばで、多くの行事に使われている。

昭和53年当時は「なぎの木の集い（6年生等に感謝する会）」として行われ、現在は、「6年生を送る会」となっている。このころから、さつまいもをつくっている。



なぎの木農園

平成14年、なかよし学級（特殊学級）の開設に伴い、1年から6年による縦割り班が「なぎの木班」と名称が変更された。

野外劇の上演

<てんてんてんぐの舞いおどり>

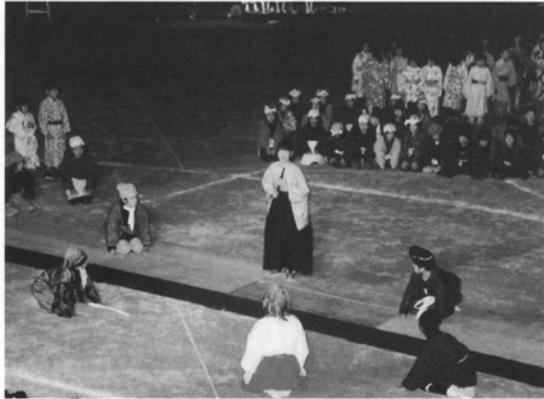
- ・石巻の自然を舞台にして演じることにより、地域に関心をもたせ、郷土愛を育てる。
- ・全校で力を合わせ、身体で表現することの喜びを感じさせるとともに、協調性、創造性を養う。

・場面

プロローグ	全校児童
小てんぐと中てんぐ	中学年
子どもたちと本宮カラスてんぐ	低学年

村人と大てんぐ
問答（全校表現）
フィナーレ
エピローグ

高学年
全校児童
全校児童
全校児童



笛吹ジンゴ

- ・野外劇を通して、ふるさとを思い、人々を思う豊かな心と、たくましく生きぬく力強さを育てる。
- ・劇のあらすじ

<笛吹ジンゴ>

今から約 860年前、戦いで田畑は荒らされ、追い打ちをかけるような日照りのため石巻の村人たちの心はすさんだ。

上の村と下の村との間で争いも起こった。そんなとき、戦いで父を亡くした少年ジンゴが石巻の里にたどりつき、争いごとのみにくさ、力を合わせることの大切さを説く。ジンゴは村人のために、日照りの原因である龍神の怒りをしずめに三ツ口池へ向かった。おかげで、村人たちは自分の過ちに気づき、平和をとりもどすことができた。

<ダイダラボチ>

シロツメクサの首飾りから香り立つ青臭さ、親指と人差し指の間でもがくセミの足の感触、アケビの朱さと夕焼けの朱さが比例することなどを、私たち大人はいつの間に忘れてしまったのか。



ダイダラボチ

自然は、これまで、私たち人間の行いに傷つきながらも、やんちゃ坊主を育てる母親のように、じっと我慢してくれていた。けれども、私たち人間は、自然のそんな優しさを分かつともせず、一段とわがままになった。一方、自然もだいぶ年をとって、昔ほどしなやかでなくなり、少しずつ壊れ始めている。

そろそろ人間も大人になって親孝行をしないと、自然は本当に死んでしまう。

緑豊かな石巻に生きる児童にこそ、自然のありがたさを実感し、自然を大切に、自然と共に生きる人になってほしい。そんな願いを「ダイダラボチ」に込めた。

<てんてんてんぐの舞いおどり>

舞台は現代、そこへ現れたのは、不思議なことに、過去の石巻に住んでいたムシゾウ。偶然、その場に居合わせた6年生4人は、ムシゾウと一緒に過去の石巻にタイムスリップする。そして、恐ろしい話を聞く羽目になる。

「ダイダラボチ」は石巻の自然そのもの。だから、ダイダラボチが見えなくなると、この世は永遠の暗黒に包まれ、人々の心は荒み互いに憎しみ合い、争うようになる。

ところで、あなたは、ダイダラボチが見えますか・・・・・・・・・・。

これらの野外劇は、昭和52年から58年までは「ダイダラボチ」を、昭和59年から63年までは「笛吹ジンゴ」を、平成2年から3年は「てんてんてんぐの舞おどり」を、平成5年以降は、3作品をローテーションで上演している。



笛吹ジンゴ

- ・平成7年、豊橋文化協会より、豊橋文化奨励賞を受賞する。
- ・平成8年、中日新聞社より中日教育賞を受賞する。

また、平成14年からは、演出家松山新平氏の監修を得て、夕方の石巻山を背景に、夜間に行われるようになった。それにかかる費用については、豊橋市教育委員会「特色ある学校づくり推進事業」の認定を受け、感動的な演出のもと上演することができた。

しかし、平成17年からは予算の関係で、再び昼間に行われるようになった。

今後は、さらに内容や演出に改良を図りながら、児童の手で長く受け継がれていくことを願っている。

3 社会教育

社会教育とは、教育全般の中で学校教育以外の分野を指すものと考えられる。学校教育についても、制度として発足するのは、明治時代以降となる。

江戸時代においては、「寺子屋」といった塾が開かれたが、通うことができたのは武士の子か資産家の子でしかなく、農民など多くの一般大衆は、文字を読むことすらできなかった。

現在の石巻校区は昭和30年（1955）に、豊橋市に合併するまでは八名郡石巻村に属していた。八名郡の歴史をまとめた「八名郡誌」（大正15年編纂）の記述によると、明治28年（1895）八名郡の教育について、教育界改造にあたり「教育活動は、学校教育以外にも指導啓蒙を要請する」との提議がされた。

翌年には「八名郡教育議会」が創立され、実践項目の中で、学校教育以外に、家庭教育や青少年教育にも関心が向けられるようになった。

明治39年（1906）に「教育議会」は「教育会」と改められ、郡内の町村に教育会の設立を促進した。

(1) 青少年教育

石巻村は大正5年（1916）に「石巻村教育会」を設立し、以降青年層を対象に夜学（国語・漢文・算術・修身など）や、農事研修が行われた。

八名郡青年団は、大正5年（1916）の創立である。それ以前からも各町村には青年会の活動があった。

若い者仲間の仕事は、町村内青年・男女の風儀を取締ったり、氏神の祭礼に際し、奉仕や警護することであった。そして、従来からの娯乐的団体から青年修業の団体へと、改造の努力が「教育会」によって行われている。

明治44年（1911）には、当時の青年会であった、石巻村大字三輪神郷壮友会の活動が表彰を受けている。

[表彰文]

其會創立以降堅實持續シ豫テ一致團結シテ時間ノ正確ヲ厲行シ土地ノ弊風ヲ矯正シテ風紀ノ振肅ニ努メ極力公共事業ニ奮勵ス延長約三十八町ノ道路修繕ヲナシタル如キハ即チ其一ナリ而シテ又能ク農閑ノ時期ニ於テ補習教育ヲ開催シテ智徳ノ増進ヲ計リ或ハ在郷軍人ヲ招待シテ銃劍ノ鍛錬ヲナシテ身体ノ健全ヲ期ス其他祖先ノ家業ヲ尚トビ勤勞ヲ重ンジ實業思想ヲ養成スル等着々其効ヲ奏スルハ本會ノ大ニ擇ブ所ナリ依テ奨勵ノ爲メ別紙目錄ノ通り贈與ス

八名郡青年団は、創立以後、年毎に総会兼運動会を開催した。石巻村は、この中の競技で、たびたび優勝旗を手に入れている。

青年会の他に、「処女会」という、結婚前の女性の会があった。



処女会

八名郡処女会は、大正11年（1922）の創立である。主な事業は、講話・短期講習・書籍雑誌の回覧などで、稀に運動会、展覧会、敬老会（青年層と共に）、見学・旅行などもあった。

神郷の東光寺では、大正初年まで夜学が行われ、当時の中西宗磧住職に漢文を習っていた。金田、高井、長楽からも集まった。

明治41年（1908）頃の「青年夜学会設置規則」が、区に保存されている。

満州事変など戦局が進む時代においては、

勉強会も軍事色が強まっていった。銃劍の鍛錬や食糧増産に力点が置かれた。

戦時中においては、教育どころではなく、娯楽も制限され、衣食住にも不自由を強いられた。

戦後間もない頃における青年の活動に「農村同志会」といった親睦会（活動に対して衣料品等の配給があった）や、それぞれの所有する書籍を持ち寄り、貸し借りのできる集まりとして「あかつき文庫」（神郷）が創られることがあった。

(2) PTA活動

児童生徒の健全な育成をめざし、父母と教職員が一体となって協力し、家庭と学校と社会において、児童の幸福な成長を図ることを目的としている。

そして、この目的を達成するために小学校PTAは次のような活動を行っている。

- ・互いに力を合わせてよい父母、よい教師、よい社会人となるように努める。
- ・学校と地域の教育活動を盛んにすることに協力する。
- ・家庭と学校と緊密な連絡を図り、児童の生活指導、危険防止、教育環境の整備に努める。
- ・役員は、次のとおりである。

会 長 1名
副会長 2名（男性1名・女性1名）
書 記 1名
会 計 2名
監 事 2名

- ・事業の主なもの、次の通りである。

研修部としては、校内研修会の開催、ブロック交流会などを行っている。

校外生活部としては、交通当番、プール監視、校外パトロールなどを行っている。

広報部としては、年間2回PTA新聞「いしまき」を発行している。

保健体育部としては、親睦ソフトバレーボール、運動会への参加などを行っている。

- ・平成17年度のPTA予算は次の通りである。
444,723円

(3) 校区社会教育委員会

校区内において、明るく、住みよい地域づくりをめざし、コミュニティの推進と地域の課題に基づく社会教育をすすめている。

校区市民館の運営や、成人式の主催等もそうした活動の一つである。

また、より広い視野での活動を目指し、名称を「石巻校区コミュニティ活動」とし、ゴミ収集活動、夏休み校区パトロール、校区盆踊り大会、校区体育大会、福祉施設交流会、小学校野外劇、校区文化祭、三ツ口池クリーン活動、市の施設見学会などを積極的に推進・支援している。

組織としては、委員長、副委員長、会計、監事、委員、顧問など総勢15名ほどで運営している。

(4) 青少年健全育成会

この会は平成4年4月1日に設立され、家庭・学校・地域社会がそれぞれの機能を発揮するとともに、相互に補完しながら青少年健全育成をすすめている。

事業内容としては、

- ・青少年健全育成に関する調査、研究に関すること
- ・青少年健全育成の計画の策定及び事業推進に関すること

を行っている。

組織としては、総代会、社会教育委員会、防犯委員会、民生児童委員会、保護司、更生

保護女性会、PTAの代表者及び地区において推薦された人など30名ほどである。

役員としては、会長1名、副会長3名、書記2名、会計1名、監事2名、顧問若干名である。

事務局は、石巻小学校内である。

事業としては、ふれあい活動、教育講演会、明るい家庭づくり運動、読み聞かせの会、530運動、プール監視、校外パトロール、あいさつ運動、文化祭、和太鼓鑑賞会、防犯マップ配布など実施している。

(5) その他の活動

石巻小学校の東南の山裾に学童保育所「ポラン」がある。

ポランは、平日の午後だけでなく、学校が長期休業となる夏休みや秋休み、冬や春休みには、朝から夕方までの1日保育を行っている。

その目的とするところは「最近の子どもの遊びと言えば、室内でのCPゲームが中心で、戸外で元気に暗くなるまで遊ぶということはほとんど見られません。子どもの健全な発達から考えれば、決してそれでいいはずがありません。しかし、両親共に子どもの遊び方をつぶさに目にする機会が少ないために、そのことになかなか気づきません。疲れやすい、無気力集中力がない、病気がちなどの問題も、遊び方に原因がある場合も少なくありません。子どもの成長にとって遊びは、食べ物や勉強と同じくらい大切なものである。好奇心やバイタリティにあふれ、目を輝かせてクルクルとよく遊ぶのが本来の子どもの姿である。そんな頼もしい次世代に育ってもらうためにも、遊びの価値を積極的に見直して行きたいものである」としている。

自然に恵まれた広い生活空間で、2人の優れた指導員により、子どもは生き生きと活動している。

4 社寺と伝説

(1) 神社

石巻神社

石巻神社は、石巻山の上にある上宮と下の下宮に分かれている。下宮を本社、上宮を奥社という。8級社である。

<祭神>

おこなむちのみこと
大己貴命（大国主命）で、大和の大神神社から分祀したと伝えられる。石船で大津（老津）に上陸した。行幸は牛車でなされたという。そのため神郷では牛を飼うことは禁じられていた。昭和9年頃、初めて金田から牛を買い入れ、以後神郷でも飼うようになった。

すきのおのみこと
天照大神の弟素盞鳴命の子供であり、勇気があり、情け深く、たいへん徳を持った神である。国を乱したり、民を苦しめたりする悪人を滅ぼし、国を治め、医療や製薬のお手本を示し、体の弱い人を安心させた。荒地や草原を開墾させ、農耕を教えたといわれる。

<由緒>

創立の年代は明らかでないが、東三河の大神として人々の崇敬が篤く、参詣者が多かった。

社伝によれば建久元年、鎌倉幕府から神領100貫を寄進された。頼朝が参拝した時、武器や祭器などを奉納した。

永正年間に今橋城が建てられて以来、その鬼門鎮守と崇められ、領内一円の祈願所となり、吉田藩主による社殿の造営や修復がなされた。

早魃や大雨、その他時々の祈願には、代参が参列するなどの恩典を受けた。

<祭礼1>

上社（管粥祭）陰暦正月14～15日に行われていたが、現在は2月第2の土日に行なわれている。

一年の作物のでき具合を占う行事である。

早朝、5時に神事が始まる。



管粥祭

神主は祝詞を奉読して祈祷する。炊煮を司る神主が石を打って神火をとり、かなえの下に用意した薪に火を焚き付ける。湯が沸騰すると18本の管に印を付けて粥の中へ入れる。祈祷が続く中、神主は時折榊の枝で作った三つ又で粥と管とをかきまぜる。朝6時、火を消して冷めるのを待って、管の中の粥の多少や水分の有無、粥つぶの欠け具合、色の可否、形の様子などを調べる。その結果から農作物の豊作か凶作かを占う。作物ごとに上中に区別し、作付けの参考にする。

作物	大麦	小麦	米	(早、中、晩)		
	大豆	小豆	稗	胡麻	蕎	大根
	黍	大角豆	麻	芋子		
	粟	(早、晩)				

<祭礼2>

下社の春季大祭は、4月5・6日に行われていた。現在は、4月の第1土日である。

本祭は、初子、新緑、新入村者の初参りがある。茅巻が一般の参拝者にも配られる。食べると丈夫になるという。茅巻を鳥小屋に吊すと蛇除けになるという。

ごま
御魔除けは、露払いともいって、神輿渡御みこしとぎよの地祓じはらいであるという。最初に子坊鬼が出る。

赤鬼と黒鬼は、各1名で、拝殿の前縁で手を広げ、足を踏張り上体を左右にゆっくりひねる。その後、腰袋のたんきり（あめと小麦粉）をつかんで観衆に投げる。たんきりを拾

って食べると夏病みしないという。この後、大鬼2名も、同じように境内の内外を駆け回り、たんきりを投げる。



春の大祭

次に、獅子が現われる。頭2名、獅子幕の中8名、拝殿の前縁から駆け降りてだち門を回り、拝殿に向かって三度左右に首を振り、三度口を開閉する。舞が終わると鬼に加わり暴れ回る。

流鏝馬・競馬は、昭和初期のころは馬が流鏝馬に12頭、競馬に36頭出たが、その後は次第に頭数が少なくなり、現在は行われていない。

地芝居は、春の大祭が終わり夕方からお堂で行なわれた時期があったが、現在は行なわれない。芝居は人気があった。



地芝居「鬼一法眼」大蔵御殿の場

主演の希望者が多かったので、一幕ものを多く演じた。

餅投げは、本祭の最後に櫓から投げる。

とうす 東頭神社

<祭神>

素盞鳴命であるが、石巻大明神も祀られていたとする説もある。

<由緒>

創立の年代は明らかではない。口伝えによれば、661年といわれている。

明治39年11月に火災にあって、社殿、拝殿など全て焼失した。幸い棟札の写しが宮司宅に残っていた。それによれば、最も古い棟札が天文16年(1547)「再興当所宮一字」とある。(一棟再興した)天正8年(1580)の棟札は、「石巻当所宮」と記されている。文禄・慶長年間(1592-1614)の棟札には、「石巻大明神宮社」とあり、その後寛文6年(1666)には、「当所天王宮」と記されている。

東頭の名を付けているのは、寛文年間以後のものである。

神領は寛永6年(1629)の検地帳に村高内引二石となっている。

大正5年(1916)幣帛供進指定村社、昭和21年(1946)宗教法人になり、12等級の神社となる。

<祭礼>



手筒

夏季大祭は、7月の第2土日に行われる。

宵祭りの夜煙火が奉納される。祭神が素盞鳴命であることから、江戸時代ごろから手筒や打揚げ花火が奉納されてきた。一時期煙火が中止されたが、また復活した。昔から金田の手筒は勇壮なことで近隣に知られ、祭礼には見物客で賑わった。

<芝居>

本祭の神事が終わってから、青年による歌舞伎芝居が演じられた。昭和11年に籠殿こもりでんが竣工してからは特に熱が入り人気もあった。青年が減ると中止された。

(2) 寺

南龍山玉泉寺

<創立>



玉泉寺境内

創立の年代は明らかではない。開山は慈雲座元である。嘉慶元年（1387）に亡くなっていることから、およそ600年ほど前と思われる。

<宗派>

臨濟宗妙心寺派の末寺 本山妙心寺は京都市右京区花園にある。創立は1337年である。

<由緒>

過去帳によれば元禄年間（1688～1704）以前の記録がないため、創立以来約300年間のことは何も分らない。

旧本堂は宝永年間（1704～1711）の建立で当時葎ぶきだった。

文政4年（1821）に瓦屋根になった。現在の本堂は昭和53年（1978）鉄筋コンクリート

建てになり、屋根は銅板ぶきに変わった。

<本尊>

文殊菩薩で、三河地方では唯一といわれている。

<境内>

観音像33体が安置されている。最も古いものは元禄年間の石像である。村で不幸がある度に観音像を作り、村民の安泰を祈った。馬頭観音が3体ある。村人の信仰を集めていた。阿弥陀堂が祀られている。明治の初期廃寺になった石巻山照明寺から移転したものである。

豊橋市の天然記念物に指定されたなぎの木がある。

湯王山東光寺

<創立>



東光寺本堂

寺伝によれば後白河法皇の勅願により承安年間（1171～1175）に建立された天台宗の寺だったとされる。当時は温かい湯がこんこんと湧き出していた。湯王山の名はこのことに由来する。

<由緒>

何年か後、火災によって全焼した。その後は荒れ果てたが、550年ほど前に繁室玄茂という僧が嵩山しょうじょうの正宗寺から来て、東光寺を再興した。

その後、学問のある有名な僧が相継ぎ、寺が栄え百姓も奮起してよい行いが目立つようになった。

<宗派>

臨濟宗妙心寺派 正宗寺の末寺 神郷は東光寺の檀家が大部分を占める。檀家数は150戸ほどである。

<本尊>

薬師如来 一木造りの座像で、後白河法皇の勅願によって承安年間（1171～1175）に建立されたという。

<寺伝>

昔、寺の山に温泉が湧いて、湯治場になっていたという。後白河法皇が湯浴みに来て、天台宗東光寺を建立したという。

(3) 伝説

庄屋庄右衛門と一本松 昔、現在の石巻小学校の西方約200mほどの道端に、10a程度の村の共有地があった。そこには、一棟の避病室が残っていた。荒れ放題で誰も近寄らなかった。ただ三本の松の木が立っていた。この松は昭和40年頃の金田の土地改良事業で倒された。村人は、ここをなぜか一本松と呼んだ。

江戸時代、年貢を決める前に、稲作のでき具合を毎年吉田藩の検見士という役人が調べに出向いてくるのが習わしだった。検見で年貢の軽重が決まるので、庄屋はたいへん気を遣っていた。

ある年のこと、庄屋木下庄右衛門は、役人を迎えて田を案内して回った。少しでも年貢を軽くしてもらおうように、心を込めて接待して村人を喜ばせようと考えていた。

一方、役人は横柄な態度でいばり散らし、無理難題といえども俺の胸一つで決まると横暴を極めていた。

検見中に雨が激しくなり、急いで庄屋の家へ走り込んで雨が止むのを待ったが、なかなか雨は止まず検見は中止になった。そこで、早めの接待をすることになったが、接待は夕方を予定していたので、準備が十分整わない

まま始めなければならなかった。

役人の着物は濡れたままで、風呂にも入らず、料理も不手際で役人は不機嫌になった。送り帰すときになっても、雨はまだ続いていた。雨の中を一本松（当時は松はなかった）まで送って行く道中にも、庄屋は年貢の軽減をひたすらお願いしたという。

役人は、遂に「だまれ！くどい」と、怒鳴り「俺をなんと心得る。恐れ多くも藩公の命を受けての検見士なるぞ。俺が蓑がさわらじばきなのに、お主は雨傘をさして下駄ばき、口を開けば年貢の軽減のことばかりしゃべりまくり、数々の無礼の極み許さん！」と、言って無礼討ちに首をはねた。



庄屋の願い

村人は「なんとむごいことを」と、叫び泣き崩れた。罪人扱いにされて、墓も建てられない庄右衛門を哀れみ、せめてこの地に木でも植えて内密に弔うことを申し合わせた。村の年貢軽減のために死罪になった庄屋を供養するために松の木を植えて墓にしたという。およそ200年前のことである。

金田の中でも最も不作の田ばかりを案内して年貢の軽減を願ったことに立腹し、無礼討ちに至ったとする説もある。

秋葉神社代参と竜 金田にある三味処（土葬の墓地）の中、六地藏様の前に小さな五輪塔がある。ひぶくろにあたる部分に7名の戒名らしい文字が刻まれていた。この塔は、遠州

秋葉神社への代参の道中、渡し船が転覆して亡くなった方を供養するために建てたものである。

古老の言い伝えでは、三口池（今の三ツロ池）は大池と呼ばれ、大きさも深さも近隣では他に見られないほど大きな池だった。だから、水が干上がることは一度もなく、底なしで、その果ては天竜川の川底とつながっていたという。

ある日のこと、鉄砲の名人と呼ばれた六兵衛という人が、朝がけの猟に出たが、その日は失敗に終わった。急いで家路に着いたが、途中、大池の畔でたばこをいっぶくしようと道端の岩に腰を下ろして火を点けた。その時1匹の大きなトカゲが六兵衛の右足の指をなめた。なんとも言えないよい気持ちになったのでじっと見ていたが、目が異常に大きいことに気が付いた。よく見ると、足首が見えない。もしかしたら、俺を飲むつもりかなと思い、腰の山刀を抜いて足へそえてみると、刀が3分の1ほど見えなくなった。

「こやつめ！」と、一気に刀を力いっぱい振ると、ザザッと山鳴りがして黒雲が湧き出て風が起これ天気は急変した。竜の化身になったのだ。あれよと思う間に雷が轟き、大粒な雨が降り出した。目の黒雲の中に赤い玉のような物がくるくる回っていたので、夢中で赤い玉を目掛けて鉄砲を射ち、一目散に家へ帰った。

その夜、六兵衛は発熱し、3日ほど床にいた。あれは何だったのか気に掛かり、怖いもの見たさに大池へ行ってみた。すると、山の端の一角にとてつもなく大きいまんまるいキノコが1つだけ出ていた。クリーム色でとてつもなく大きい笠が開いていた。気味が悪くなり、狩りもせずに帰った。

この年の12月、例年のとおり遠州の秋葉神社へ、村の代表として2名が代参し、お札を

受けてくるはずだった。このしきたりは、今も残っている。当時は徒歩で旅をしたので、途中一泊した。多くの人は鹿島か二俣で泊まったそう。鹿島からは渡し船で天竜川を上り、犬居まで約17kmの船旅である。その渡しを、雲名の渡しと呼んだ。犬居から秋葉山へ上がった。

例年なら静かな川の流れなのに、この年は荒れて、船は転覆して2人は亡くなった。よく年も代参を送ったところ、また船が転覆して2人とも命を落とした。

このころ、金田でも遠州でも噂が流れた。三口池には、天竜川に棲んでいた夫婦の竜が遊びに来ていて、六兵衛に鉄砲で射たれて雄が死んだ。雌はたいへん怒り、金田の人が渡し船に乗ると、船についてきて殺したと言うのだ。

3年後も代参を送ったが、2人とも同じように亡くなった。以後、雲名の渡しでは「三河の人、特に金田の人は乗せない」と、船頭が断るので、金田という言葉は禁句になったそうだ。

それでも代参は続いた。乗船する際は、金田から来たとは決して言わず、そ知らぬ顔で乗船したが、またしても転覆して一人が亡くなった。助かった人はお札を持ち帰って来れたことは神仏のお陰と感謝した。



天竜川の竜

天竜川の竜が仇討ちをするのなら、生き残った私が7人の霊を弔うとともに、竜の供養

をして、再びこのようなことが起きないように塔を建てて供養したという。

その後は、天竜川での遭難はなくなった。平成18年3月、風化の進んだ五輪塔を新しく建てて供養を続けていくことにした。

提灯 日露戦争が始まって、近郷近在の人は、大陸に出征兵士として従軍した。出征兵士の妻たちは、昼間は夫の分まで仕事をしなければならぬので忙しく、夫の無事を石巻神社に願掛けに行くのは夜になってからだった。毎晩、提灯を灯して山上の石巻神社へお参りしていた。

ある晩、山の途中まで登って来ると、目の前に、鳥のような顔をした人とも獣ともつかぬものが立っているのに出会い、驚いて一瞬立ち止まった。すると、突然提灯が手元から離れ、その得体の知れぬものと共に空に舞い上がり、西の方角に飛んで行った。妻は、突然のできごとと暗やみのため歩くこともできず、暫らくその場に座り込み、いつもお参りしている石巻神社に向かって手を合わせ、神のご加護を祈った。



天狗のご利益

それから1時間ほどして、提灯が西の空から舞い戻った。「ありがたや、ありがたや」と提灯を片手にかざして辺りを見回したが、鳥のような顔をした得体の知れぬものもいなかったの、おそろおそろ山を登り石巻神社にお参りをして帰った。

一方、大陸の夫はその夜部隊の斥候（見回り）に出ていたが、闇夜のため途中で道に迷い、部隊の居場所が分からなくなり困り果てた。それで、氏神の石巻神社の方角に向かって一生懸命神のご加護をお祈りすると、突然東の空から自分の家の家紋が付いた提灯が飛んで来て、足元を照らして部隊へと導いてくれた。これは神さまのご加護によるものと提灯の導くままに付いていき、自分の部隊に戻ることができた。夫を部隊へ送り届けると提灯は東の空へ飛び去った。

夫はこのことが気に掛かり、凱旋後故郷に帰ってこの話を妻や村人にすると、妻が「それで分かりました。実は私が毎晩提灯を持ってあなたの無事を願掛けに石巻神社にお参りしてました」と、あの時のできごとを話したのだった。

夫は「やはり石巻神社のご加護によるものであり、あの提灯は石巻山の天狗が神の使いとして、大陸まで持ってきて、おれを助けてくれたのだ。ありがたいことだ。」と、一族そろって石巻神社にお参りしたことは勿論、夫婦は、毎年その日になると、石巻神社と天狗さまにお礼参りを欠かさないという。



天狗岩の天狗

雨乞いの神事 日照りが長く続き作物が枯れる恐れがある場合、特別に雨乞い神事が催された。

江戸時代では、領主が渥美、八名、宝飯の3郡の各村のおもだった百姓を石巻神社の上宮に招き、役人を出向させ一夜もしくは三日三夜ないし七日七夜の雨乞いの大祈願祭を行った。

天明5年(1785)5・6月に亘る大日照りの際は、梅雨に入っても空梅雨で川の水さえ涸れ、稲は枯れる寸前あるいは田植えができないほどだった。それで、雨乞い神事が行われた。

最初は一夜ごもり、氏子、村人は午後6時に石巻神社下宮に集まり、古田、大木神主が交互に祝詞を奉読し、氏子、村人は頭を下げ一心不乱に雨を降らして欲しいと夜を徹して祈願し朝6時まで続けた。



雨乞い

一旦帰宅し午後になっても雨は降らなかった。その日の夜から二日二夜続けて祈願した。こうすれば、どんな大日照りでも雨が降ると言い伝えられていた。しかし、この祈りも効き目がなかった。それで、七日七夜の大祈願を掛けることになった。

氏子、村人百家百人が2つに分かれ、一昼夜交代で祈願した。

まず、下宮に大木神主と村人50人、上宮に古田神主と村人50人が詰めた。終わるまで家へ帰ることは許されなかった。夕方には嫁が家人のところまで食事を届けた。一心に願をかけ雨の降るのを願うばかりだった。

七日七夜の祈願が終わった日、各家で松明一對を作って、1つは下宮から上宮までもう1つは上宮からお岩の上に乗るまでの暗い道を歩く時に照らすのに使った。

また、どこの家も薪か柴の一束ずつをお岩の上に運んで山積みにし篝火の準備をした。

薄暗くなる時分に氏子、村人は松明を持って下宮へ出かけ、神事の始まるのを待った。庄屋は氏子、村人を招き入れてご祈禱を始めた。神主は装束をつけていかめしく祝詞を読み上げた。氏子、村人も羽織袴を着用し、頭を下げ雨が降って五穀豊かに実るように願をかけた。

祈願が終わると広場へ下がって松明に火をつけると、一面火の海になり、100余りの火が明るく光り輝き昼間を思わせるほどになった。参道がまるで火の川と化し、天に輝き天狗や山の神の火渡り行列と見違えるほどだった。

太鼓や横笛の音が鳴り響くなか雨乞いの歌声がきれいに広がった。

上宮のお社の前で松明の火が大きく燃え上がった。神主の祈禱が山に響いた。やがてお岩まで着き、雨乞い神事が始まった。

祝詞に続いて薪や柴に火をつけると、天を焦がすほどに立ち上り、黒い煙が空にみちてまるで火山の噴火のごとく、火は激しく燃えた。

雨乞いの歌声が響く中、火は鎮まり雨乞いの神事は終わった。村人たちが家に着くころ急に地が鳴り動くような大きな音がして雷が鳴り、雨が氷の固まりを交えて激しく降り注いだ。

乾いた田んぼに水がついて、枯れかかった稲が生き返り、村人は喜んだ。夜が明けるのを待って、お礼参りの人々が参道を塞ぐほどで、喜びの声が石巻山に充ち溢れた。

(4) 人物

小柳津勝五郎 弘化4年(1847)金田に生まれる。明治12年(1879)名古屋に学農社を設立する。焼土の肥料としての効能を唱える。明治23年石巻本町神ヶ谷に居を構え、原野4町歩を購入して開墾しながら燻焼土肥料の研究に没頭した。

日夜、苦心を重ねて燻焼土肥料の製造に成功した。明治32年農務商省に燻焼土肥料の普及を進言したが、効果が薄いとして認められなかった。彼は直接農民に訴え、普及を図ろうと全国遊説を試みたが思うほどの反響がなかった。

さらに研究を深め明治33年天理農法(自然の理に則った農業)を発明した。米麦や野菜を栽培した結果、その効果が認められた。「実業の世界」に掲載されて全国各地で試みられるようになった。大正2年死去。

斎藤百合(野口小つる) 明治24年(1891)金田に生まれる。はしかの後遺症で3歳で失明。岐阜盲学校、東京盲学校で勉学に励む。28歳のとき創立された東京女子大学へ進学。そのとき、盲学生の第一号3人の子どもの母親でもあった。

夫は斎藤武弘氏、東京盲学校時代の後輩で外科病院のマッサージ師だった。夫婦で日本の盲女性福祉や経済的自立に尽力。その後2人の子どもが誕生し、厳しい生活の中で懸命に活動した。

昭和5年に池袋に陽光会治療所を開設。昭和10年には雑司ヶ谷に陽光会ホームを開設、盲女性40人が外国語、家庭科を学ぶ。健常者の支援を受けて、月刊誌『点字倶楽部』を発行するなど、障害者福祉の向上に貢献。

彼女の半生を描いた映画『鏡のない家に光あふれ』は各地で上映された。昭和22年死去
大木知足(聶治) 文久3年(1863)渥美郡牟呂村大西、芳賀清次郎の次男として生まれ

る。幼くして明敏にして学を好み、渥美義塾に学んだ後、小学校に職を奉ずる傍ら学識を積む。

明治19年石巻神社の世襲神主であった大木家の養子となる。以来、石巻神社の顕彰に努め、明治維新以降途絶えていた流鏑馬(文武天皇のころに始まったと伝えられる競馬)馬揃え(鎌倉時代から挙行されたと伝えられる競馬)神事の復興に尽力。(現在は途絶えている)



流鏑馬

神社上地林の復旧、植林並びに本社および山上奥宮の改築に貢献。また、八名教育会の学務委員として進んで地方の教育、自治の振興に挺身し、三輪村青年夜学会の開設、郷土資料調査、土地整理地図調整、羽田野文庫蔵書の回収・保護など、その功績は極めて顕著である。

昭和15年に、叙正七位叙勲六等瑞宝章を賜る。昭和17年死去。

野口熊次郎 明治13年神郷の中屋敷に生まれる。小学校を卒業後役場へ就職。しばらくして、腕に職をつけるという思いで籠屋に弟子入り。

明治30年、17歳で年季があけると独立。牛川で商売を始めた。大変研究熱心でよく工夫されていて、軽くて丈夫なのが好評だった。

独創的な花籠やあやめなどの工芸品も造るようになり、大阪以東の第一人者と言われるほどの腕前だった。



籠づくり

宮中へ献上するものを造るときは、身を清め心の乱れるのを防ぐために、家の人々が寝静まった真夜中に集中して作業をした。

東三河を中心に東加茂辺りまで出向いて指導もした。

中西宗磧 そうせき 文久元年（1861）宝飯部前芝村に生まれる。父は塩野谷福寿、母は豊橋市魚町の中西氏で、中西の姓を継ぎ11歳で老津の太平寺に入り、南岳和尚に就き出家得度する。

四書五経、史記、漢詩、百家の書を修め、仏学儒学に研鑽の功を積む。明治30年2月請われて東光寺の住職となる。荒れていた境内や、周囲の修復、地域のかんがい・開墾に際し、土工夫人に交じり事業を推進する。



かんがい・開墾事業

また、青年の育成・教育のため、夜学会を組織。110名を超える門下生は神郷内に止まらず、金田・高井・長楽などに及ぶ。

後に、東京大学や市議会議長を務めた方の名もある。大正9年死去

野口 知 明治30年金田に生まれる。当家は代々庄屋を務めたことがある素封家。祖父藤吉氏は三輪村長を務めた。父は三輪村収入役を務めている。

愛知県立第四中学校を卒業。大正7年三輪小学校訓導を振り出しに24年間教員として青少年の健全育成に貢献。

昭和16年退職して以降、農業実行組合長、金田区長、石巻村翼賛壮年団長などを歴任。戦後昭和21年民生委員を委嘱され、混乱した時代の窮民保護救済に尽力。昭和27年石巻村教育委員を一期、同30年豊橋市に合併後、市議会議員に当選し一期務め、市勢の発展に貢献。その間豊橋市農業委員二期兼任、同34年には民生児童委員の委嘱を受け二期社会福祉の向上に寄与。

その後も豊橋市遺族連合副会長、県連常任理事を歴任するなど多数の役職を務め、当地方の発展に尽力し幾多の功績を残した功労者である。石巻保育園の開設に尽力、初代園長を務め園歌の作詞者でもある。

野口佐和多 大正4年、金田の農家に生まれる。若い頃から勉学に仕事に励む。金田区長、東頭神社氏子総代、玉泉寺総代、延寿会（老人会）会長など多数の要職を歴任。

60の手習と称して書道に励み師範の資格を得る。石巻地区市民館ができると水墨画を習う。師匠が亡くなると指導者になり、書道と水墨画を教え、賀茂、嵩山、下地、東田、湖西などから依頼があれば指導に出向いた。

水墨画の白龍会を結成し、毎年作品展を開催。多くの方が鑑賞に訪れた。人柄もすばらしく大勢の弟子に慕われた。豊橋の文化の発展に貢献。その功績が認められ、平成13年豊橋市より文化振興賞を受賞。

平成17年死去。

参 考 文 献

- ・豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書
豊橋市教育委員会 平成15年
- ・八名郡誌 八名郡 大正15年
- ・石巻村誌 石巻村 昭和32年
- ・神ヶ谷郷土史 佐野康一 昭和51年
- ・東三河の伝説物語 乙部静夫
- ・石巻山紀行 古田悟一 昭和41年
- ・石巻神社と大木氏一族
石巻神社奉賛会 昭和22年
- ・びざん 59号
美術文化史研究会 昭和44年
- ・豊橋市自然環境保全基礎調査報告書
豊橋市 平成11年
- ・豊橋の自然発見
豊橋の自然発見編集委員会 平成12年
- ・石巻山と弓張山地の自然
豊橋市自然博物館 平成15年
- ・豊橋の史跡と文化財（第3版）
豊橋市教育委員会 平成10年
- ・ふるさと豊橋
豊橋市社会教育連絡協議会 昭和54年
- ・愛知県自然公園及び愛知県自然環境保全地域の概要 愛知県 平成17年
- ・農業博物誌 玉川大学出版部 昭和53年
- ・豊川用水事業誌 水資源公団 平成14年
- ・豊川総合用水事業のあらまし
愛知県豊橋農地開発事務所 昭和54年
- ・石巻の柿 岩瀬千賀繁 平成5年
- ・愛知の果樹 愛知県果樹振興会 平成10年
- ・豊川用水 愛知用水公団 平成14年
- ・夕張風土記 豊橋市立石巻中学校 昭和55年
- ・豊川用水史 水資源開発公団 昭和50年
- ・三河玉川御所と広福寺 松井 勉
- ・学校沿革史 豊橋市立石巻小学校
- ・研究冊子 豊橋市立石巻小学校
- ・自治団体沿革 地方自治調査会 昭和50年
- ・金田文化協会会報 第9号
金田文協事務局 平成4年
- ・金田文化協会会報 第13号
金田文協事務局 平成5年
- ・金田文化協会会報 第17号
金田文協事務局 平成6年

編 集 後 記

校区の歩みの編集に携わって、郷土の成り立ちを改めて認識することができた。石巻校区の「ミワ」という呼び名についても、その由来と歴史的背景を知ることができ、郷土への愛着がより深くなった。(野口 尚)

地域の言い伝えや民話などが、世代交代のなかで失われていくことに寂しさを感じるのは年を重ねたせいだろうか。

今回の作業は、残された記録と記憶を少しでもとどめるための良い機会であったと思う。

(原田 宜和)

ふるさとを語る時、自然や名所だけではなく、歴史を語ることが大切である。今を生きる者にとって50年先は、過去となってしまふ。校区史は過去を振り返るものであるが、今を語り継ぐものでもある。これからの50年を、この校区史に積み重ねていただけたら幸いである。(山本 隼彦)

平成16年5月、豊橋市総代会において、市政100周年記念事業の一つとして、校区ごとに校区の歩みを約2年半でまとめる計画が出された。編集委員を選出してサポーターの方々の協力を得て、資料の収集や準備に汗をかいたことを思い出す。

(飯田 敏明)

このたび、豊橋市制100周年に協賛し石巻校区初の記念誌を発刊することができることは、誠に慶ばしいかぎりである。

発刊にあたり、編集委員をはじめ多くの方からご厚意、ご協力を賜り、心からお礼申し上げます。

(菅沼 通郎)

豊橋自然史博物館をはじめとして多方面の皆さんが、豊橋のシンボルとしての石巻山に関する学術論文や手引書をたくさん発行されていることを知

った。執筆にあたり大半を引用させていただいた。

この素晴らしい自然環境を守り、後世に伝えていくことが私たちの使命であると再認識したところである。(岡本 彰雄)

学校の教科書の内容は一般的に認められた歴史の見方だが、郷土の歴史となると人それぞれだ。悩んだ結果は小さなものになってしまったが、次のステップに何か役立てば、幸いである。

校区の郷土史家が精進してくれることを願っている。(大木 巖)

私の記述は浅学非才と資料不足で石巻校区の事とは程遠い概念的なものになってしまった。しかし、市制100周年記念事業の趣旨に添い、皆さん方の校区への認識と愛着のために少しでも役立てば望外の幸せである。(木下 寛)

石巻村とすれば、今年は市になって(昭和30年3月併合)から51年である。この校区史の一部はホームページでも公開しますので、ご覧ください。

(伊藤 孝良)

石巻校区は歴史的にみて特別な変化はない地域である。歴史的な資料も乏しいため校区の歴史というより、今日までの歩みを読み物としてまとめることにした。

石巻校区にはこれまでまとまった歴史的な読み物は遺されていない。編集委員もこのたびいろいろな資料を通して初めて知ったということが多くあった。校区の方にぜひ読んでいただき、石巻への愛着をもってくださることを願っている。

編集にあたり写真や文献などの貴重な資料を提供して下さった方々に厚く御礼申し上げます。

(編集委員長 野口 義彦)

石巻町ホームページ

<http://ishimaki-kouku.hp.infoseek.co.jp>

石巻校区史編集実行委員

編集委員

菅沼 通郎	鈴木 節二	乙部 強	野口 義彦	岡本 彰雄	大木 巖
山本 隼彦	木下 寛	伊藤 孝良	野口 尚	原田 宜和	飯田 敏明

挿し絵

夏目いつ子	百嶋 盛之	市川みき子
-------	-------	-------

写真

豊橋自然史博物館	大木 基也	野口 章	竹下 貞子	西川 叡子
----------	-------	------	-------	-------

校区のあゆみ 石巻

平成18年12月25日発行

編 集 石巻校区総代会
石巻校区史編集委員会

発 行 豊橋市総代会

印 刷 株式会社 きょうせい

R100
当誌配合率100%再生紙を使用しています

PRINTED WITH
SOY INK
Network of American Soybean Association



2006年
市制100周年
100th Anniversary Toyohashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋